

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書IX

鳥取県東伯郡琴浦町

久蔵谷遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所



久蔵谷遺跡全景（写真中央、南西から）



久蔵谷遺跡（調査区南側、俯瞰）



SI2 炭化材出土状況（北から）



SK2 炭化材出土状況（北東から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところではありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、琴浦町にある久蔵谷遺跡では、古墳時代の焼失住居や製炭土坑など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有 田 博 充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」、「久蔵谷遺跡」、「化粧川遺跡」、「八幡遺跡」、「中道東山西山遺跡」、「福留遺跡」、「湯坂遺跡」、「南原千軒遺跡」の9遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「久蔵谷遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月


国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉 本 昭 夫

例 言

1. 本書は国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として平成16年度に行った久蔵谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地、調査面積は以下の通りである。
きゅうざうだいにい せき とっとりけんとうほくぐんこうらちょうおおあざかさみあざかじょうざか ほか
久蔵谷遺跡：鳥取県東伯郡琴浦町大字笠見字加杖阪578他
調査面積：3,245㎡
3. 本報告書における方位は公共座標北を示す。X：、Y：の数值は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。また、標高は4級基準点H10-3-16（X：-56012.269、Y：-60329.981）を基点とする標高値を使用した。
4. 本報告書に掲載した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「大山・赤碕」、東伯町地形図1/5,000「新農業構造改善事業（東伯地区）No.1」を使用した。
5. 出土石器の石材鑑定については、鳥取大学名誉教授 赤木三郎氏にお願いした。
6. 本報告にあたり久蔵谷遺跡の基準点測量、調査前航空写真、調査後航空写真、出土炭化材の年代測定、出土炭化材の樹種同定を業者に委託した。
7. 本報告にあたり使用した実測・浄書は、当財団埋蔵文化財センター、及び東伯調査事務所で行った。
8. 本報告書に使用した遺構・遺物写真は文化財主事・調査員が撮影した。
9. 本報告書の執筆は、野口良也、濱本利幸、阪上志緒里が分担し、目次と文末に文責を記した。編集は野口が担当した。
10. 出土遺物や図面、写真などの記録は鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。
11. 現地調査及び報告書作成にあたり下記の方々に御指導、御協力いただいた。
岡野雅則、高田健一

（順不同敬称略）

凡 例

1. 久蔵谷遺跡では出土遺物の注記に「久タニ」の略号を用いた。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。
SI：竪穴住居跡 SS：段状遺構 SK：土坑・製炭土坑 SD：溝状遺構 P：柱穴・ピット
3. 遺構・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下の通りである。
竪穴住居跡・段状遺構・溝状遺構：1／80 土坑：1／40
土器：1／4 石器・礫：1／1、1／2、1／3、1／4、1／8 鉄製品：1／2
4. 遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明がない限り以下の通りである。また、遺物実測図の断面は白抜きで示した。

■ 地山 □ 貼床 ■ 焼土面・焼土 □ 土器赤彩・石器磨面 ■ 石器敲打痕
S：石器・礫 F：鉄製品
5. 法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
6. 久蔵谷遺跡の以下の遺構については、発掘調査時における遺構名、番号を報告書作成時に変更している。
SI 1 → SK 6 SI 3 → SI 1
7. 土器の年代観は以下の文献に拠る。
弥生土器：清水真一1992「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編』木耳社 政岡
睦夫・松本岩雄編
土 師 器：牧本哲雄1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』鳥取県教
育文化財団

目 次

序
序文
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯	(野口)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過と方法		2
(1) 調査の方法		2
(2) 調査の経過		2
第3節 調査体制		3
第2章 位置と環境		4
第1節 地理的環境	(牧本・野口)	4
第2節 歴史的環境	(牧本)	5
第3章 久蔵谷遺跡の調査		8
第1節 遺跡と調査の概要	(野口)	8
第2節 遺構と遺物		9
(1) 竪穴住居跡	(野口・濱本)	9
(2) 土坑	(野口・阪上)	17
(3) その他の遺構	(野口・濱本・阪上)	23
(4) 遺構外出土遺物	(阪上)	25
第4章 自然科学分析の成果	(濱本)	26
第1節 久蔵谷遺跡出土炭化材の年代測定	(株)加速器分析研究所	26
第2節 久蔵谷遺跡竪穴住居出土炭化材の樹種	パリノ・サーヴェイ株式会社	29
第3節 久蔵谷遺跡製炭土坑出土炭化材の樹種	パリノ・サーヴェイ株式会社	31
第5章 まとめ	(野口)	33

遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第17図	SK 2実測図	18
第2図	琴浦町位置図	4	第18図	SK 2炭化材出土状況図	18
第3図	琴浦町主要遺跡位置図	6	第19図	SK 3実測図	19
第4図	基本層序	8	第20図	SK 3炭化材出土状況図	19
第5図	調査前地形測量図	9	第21図	SK 4実測図	20
第6図	調査後地形測量図	9	第22図	SK 4炭化材出土状況図	20
第7図	SI 1実測図	10	第23図	SK 5実測図	21
第8図	SI 1遺物出土状況図	10	第24図	SK 5遺物出土状況図	21
第9図	SI 2実測図	11	第25図	SK 6実測図	22
第10図	SI 2遺物出土状況図	12	第26図	SS 1実測図	23
第11図	SI 2炭化材出土状況図	13	第27図	SS 1出土遺物	23
第12図	SI 2 P 4 上面集礫検出状況図	14	第28図	SD 1実測図	24
第13図	SI 2出土遺物	15	第29図	SD 1出土石器	24
第14図	SI 2 P 4 上面出土礫①	15	第30図	遺構外出土土器	24
第15図	SI 2 P 4 上面出土礫②	16	第31図	遺構外出土石器	25
第16図	SK 1実測図	17			

挿表目次

表1	ピット表	24	表5	樹種同定結果	31
表2	竪穴住居跡放射性炭素年代測定結果	27	表6	久蔵谷遺跡出土土器観察表	35
表3	製炭土坑放射性炭素年代測定結果	28	表7	久蔵谷遺跡出土石器・礫観察表	36
表4	樹種同定結果	29	表8	久蔵谷遺跡出土鉄製品観察表	36

図版目次

巻頭図版 1	久蔵谷遺跡全景(写真中央、南西から) 久蔵谷遺跡(調査区南側、俯瞰)	状況
巻頭図版 2	SI 2炭化材出土状況(北から) SK 2炭化材出土状況(北東から)	PL. 6 SK 5炭化材出土状況、SK 5・6完掘状況
PL. 1	SI 1・2遺物出土状況、SI 1完掘状況	PL. 7 SS 1遺物出土状況・完掘状況、SI 2出土土器
PL. 2	SI 2炭化材・P 4上面集礫出土状況	PL. 8 SI 2・表土出土土器
PL. 3	SI 2完掘状況・貼床除去後、SK 1完掘状況	PL. 9 SI 2・SS 1出土土器、SI 2出土石器・礫、SI 2 P 4上面出土礫
PL. 4	SK 2土層断面・完掘状況、SK 3炭化材出土状況	PL.10 SI 2出土水晶剥片・鉄製品、表土・遺跡一括出土石器、SS 1・SD 1・表土出土石器
PL. 5	SK 3・4完掘状況、SK 4炭化材出土	PL.11 久蔵谷遺跡出土炭化材顕微鏡写真

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

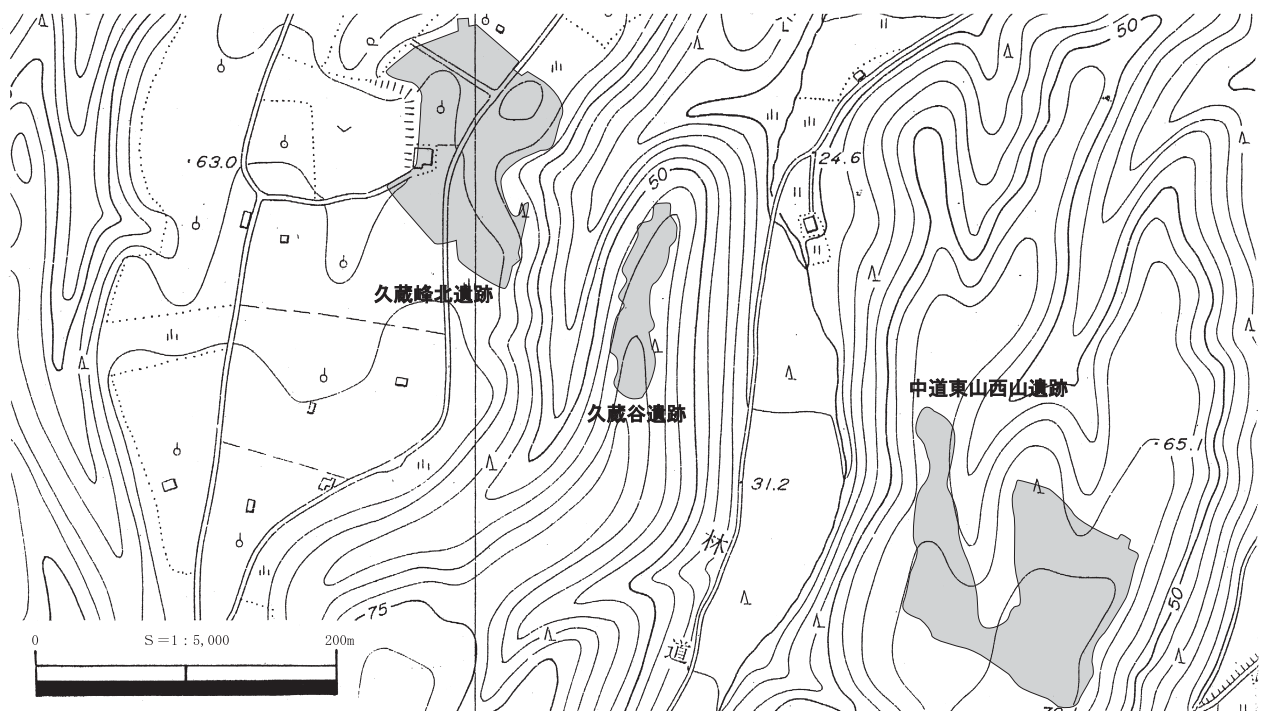
本発掘調査は、一般国道9号東伯中山道路の改築に伴い、東伯郡琴浦町笠見地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である久蔵谷遺跡の記録保存を目的としたものである。当該地は、旧東伯郡東伯町に所在するが、平成16年9月1日に西隣の旧赤碕町と合併し、琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧東伯町地内には中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡、井岡地頭遺跡、井岡地中ソネ遺跡、三林遺跡、笠見第3遺跡、中道東山西山遺跡、久蔵谷遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、岩本遺跡、八橋第8・9遺跡といった多数の遺跡があり、建設に先立ち計画地内の遺跡及び遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、東伯町教育委員会が平成11年度から15年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行った。当該地の試掘調査は、平成15年度に行われた。

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に当財団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

久蔵谷遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である久蔵峰北遺跡の東側に細い谷を挟んで隣接した、標高55～64mの丘陵先端部の脊せ尾根上に位置する。調査面積は3,245㎡である。



第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

(1) 調査の方法

久蔵谷遺跡では、調査に先立ち平成16年3月4日に調査前航空写真撮影の業者委託を行った。調査前地形測量は、久蔵谷遺跡の西側に隣接する久蔵峰北遺跡の基準杭を基点とした測量杭の設置後に、当財団で行った。また、基準点測量は業者委託し、表土剥ぎは重機を使用した。

遺構検出等の調査は八幡遺跡の調査終了を待って着手した。調査においては、公共座標第V系に基づく10m間隔の基準杭を設置した。これらの杭は、東西軸に算用数字、南北軸にアルファベットを付し、「A1杭」のように呼称し、杭によって10m四方に区画された地区は、その北東隅の杭をもって区画名とした。また、久蔵谷遺跡の調査では、調査区の一部においてソフトロームを主体とする2次堆積土を遺構確認面とした。このことから、確認された遺構よりも古い時期に属する遺構の検出漏れを防ぐため、基準杭に沿ったトレンチ調査により、ロームを主体とする2次堆積土を除去し、地山面までの確認を行った。

検出した遺構・遺物の記録には平板及び光波トランシット、自動レベルを用いた。調査地での写真撮影には35mm判と6×7判を使用した。遺物写真撮影は6×7判と4×5判カメラを用い、いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用した。

(2) 調査の経過

久蔵谷遺跡では4月12日に重機による表土剥ぎを行い、8月18日から作業員を稼働して調査を開始した。調査開始当初は、調査地が急峻な尾根上に立地することから、調査地までの通路設置などの環境整備に努めた。

遺構検出作業は8月24日より調査区南側より着手した。確認された遺構は竪穴住居跡2棟、土坑6基、段状遺構1基、溝状遺構1条を数えるが、このうち土坑4基は近年、県中部で確認例が次ぐ製炭土坑であった。また、焼失住居であるSI2は最も残りの良い部分で、検出面から床面までの深さが1m以上を測るなど、良好な遺存状況での調査となった。

なお、調査は当初10月上旬までを予定して行われていたが、調査期間後半は天候に恵まれなかったことから10月下旬までに延長して行った。

16年3月4日	調査前空撮（業者委託）	15日	SK4（製炭土坑）の調査
4月5日	調査前地形測量	16日	SK5（製炭土坑）の検出
8日	基準点測量（業者委託）	28日	SI2が焼失住居であることを確認
12日	表土剥ぎ		
8月18日	作業員稼働、発掘器材の搬入	10月6日	SI1（旧SI3）の検出
20日	基準杭設置	12日	SD1の検出及び完掘
24日	遺構検出作業開始	13日	調査後空撮（業者委託）
26日	SK6（旧SI1）の検出・調査	10月14日	SK4の調査終了
27日	SK1の検出・調査	18日	SI2南西柱穴上面及びその付近から集礫を確認
9月2日	SK2・3（製炭土坑）の検出	28日	発掘調査終了
8日	SI2の調査		
9日	SS1の検出		

第3節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 登

埋蔵文化財センター

所長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 竹内 茂

次長（専門） 加藤 隆昭

調査課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶務課

課長（兼次長） 竹内 茂

主幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 東伯調査事務所

所長 佐治 孝弼

班長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山 浩和（福留遺跡・湯坂遺跡担当）

君嶋 俊行（南原千軒遺跡担当）

高尾 浩司、小口英一郎（中道東山西山遺跡担当）

野口 良也、濱本 利幸（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

玉木 秀幸、浅田 康行（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

恩田 智則、小谷 郁夫（化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当）

調査員 西川 雄大（南原千軒遺跡担当）

岩井 美枝、福井 流星（中道東山西山遺跡担当）

前島 ちか（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

阪上志緒里（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 琴浦町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

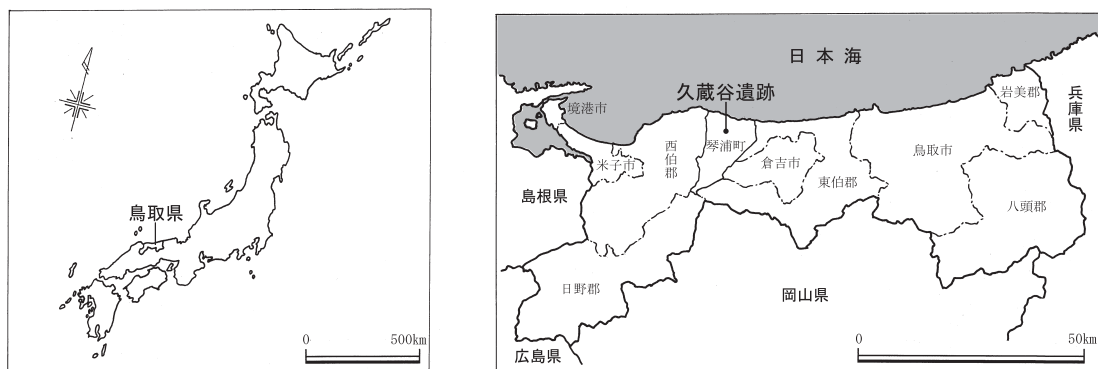
久蔵谷遺跡が所在する琴浦町は、平成16年9月1日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した、新しい町である。この町名は、かつてこの地域の海岸一帯が「琴ノ浦」と呼ばれていたことに由来する。当町は鳥取県中部、東伯郡の西側を占める位置にあり、町域は、大山連峰の烏ヶ山（1,381m）から船上山（615m）を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測り、人口は約20,500人（平成16年末）である。

本町の地勢は、大山（1,729m）山系から手指状に派生する急峻な丘陵地、加勢蛇川・洗川及び勝田川・黒川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で細かな起伏が認められる。丘陵地は、火山灰土の堆積した溶岩台地状地形が海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計8本の川が日本海に注いでいる。

当町の北側は、国道9号線沿線で弱電、酒造、食品製造などの商工業地域が形成されている。特に、八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流及び戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道の清水駅、中世以降は八橋城が築かれた場所でもある。赤碕港は、主に沿岸漁業が盛んである。町中部域は、県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、丘陵上では昭和20年代から二十世紀梨栽培が行われ、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県湯梨浜町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立つようになった。また、平野部においては水稲とともにかつては国内でも有数の芝栽培の他、ブロイラー、乳牛、和牛などの畜産も盛んに行われている。町域南側は、国立公園の一部の大山滝、伯耆大シイ、船上山などが知られ、風光明媚な自然・景勝地を求めて観光客が訪れる地域となっている。

町内の遺跡は、加勢蛇川下流域右岸の低丘陵地と、加勢蛇・洗川左岸の丘陵台地とその山裾付近、勝田川流域及び黒川左岸丘陵上に集まっている。加勢蛇・洗川両河川に挟まれた平野部には、律令時代の条里制の名残が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りがよいとは言えない。

久蔵谷遺跡は、JR八橋駅の南約1km、標高55～64mの丘陵先端の瘠せ尾根上に位置する。また、遺跡の西側には狭い谷を挟んで、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡65棟が認められた集落遺跡である久蔵峰北遺跡が隣接する。（牧本・野口）



第2図 琴浦町位置図

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代 鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていない。当町でも松ヶ丘、槻下で尖頭器が数点、三林遺跡(6)でサイドスクレーパー、笠見第3遺跡(7)で舟形細石刃石核が見つかったが、層位的にはいずれも確認されていない。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では大栄町西高尾谷奥遺跡(4)で押型文土器とともに住居跡の可能性のある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡(68)、森藤第1・2遺跡(39)、上伊勢第1遺跡(2)などで土器片が出土している。中期では、井岡地中ソネ遺跡(5)、井岡地頭遺跡(4)など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第2遺跡では中央に石囲い炉をもつ竪穴住居が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。また、勝田川左岸の南原千軒遺跡(19)では、中津式併行期の竪穴住居跡の他、今朝平タイプに類似した土偶が出土している。その他、この時代と考えられる落とし穴が福留遺跡(17)、化粧川遺跡(16)、笠見第3遺跡、中尾第1遺跡(1)など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代 弥生時代に入り本格的に稲作が始まると、それを機軸とした社会が形成される。前期に米子市目久美遺跡で水田が確認されているが、県中部では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期の集落も見つかっていないが、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡(3)、井岡地頭遺跡などで土器が出土している。中尾第1遺跡では、前期後葉の配石墓・土壌墓が集中している他、三保第1遺跡でも集石遺構が見つかった。中期の遺跡は、中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡で竪穴住居が検出されている他、墓ノ上遺跡(67)、別所女夫岩峯遺跡(63)で木棺墓が検出されている程度である。

中期後葉から古墳時代初頭にかけて、丘陵上を中心に集落遺跡が大幅に増加する。森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡(30)、大峰遺跡(40)、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡(51)、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡(10)、福留遺跡などがある。これらの遺跡の中には、集落内に玉作り工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに鉄製工具等が出土している。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡は、後期の工房跡で碧玉・緑色凝灰岩製の管玉未製品や剥片が多数出土しており、製作に当っては鉄器が使用されている。

湯坂遺跡(20)では、小型の墳丘墓が築造されている他、井岡地中ソネ遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の溝で区画された土壌墓群が見つかった。

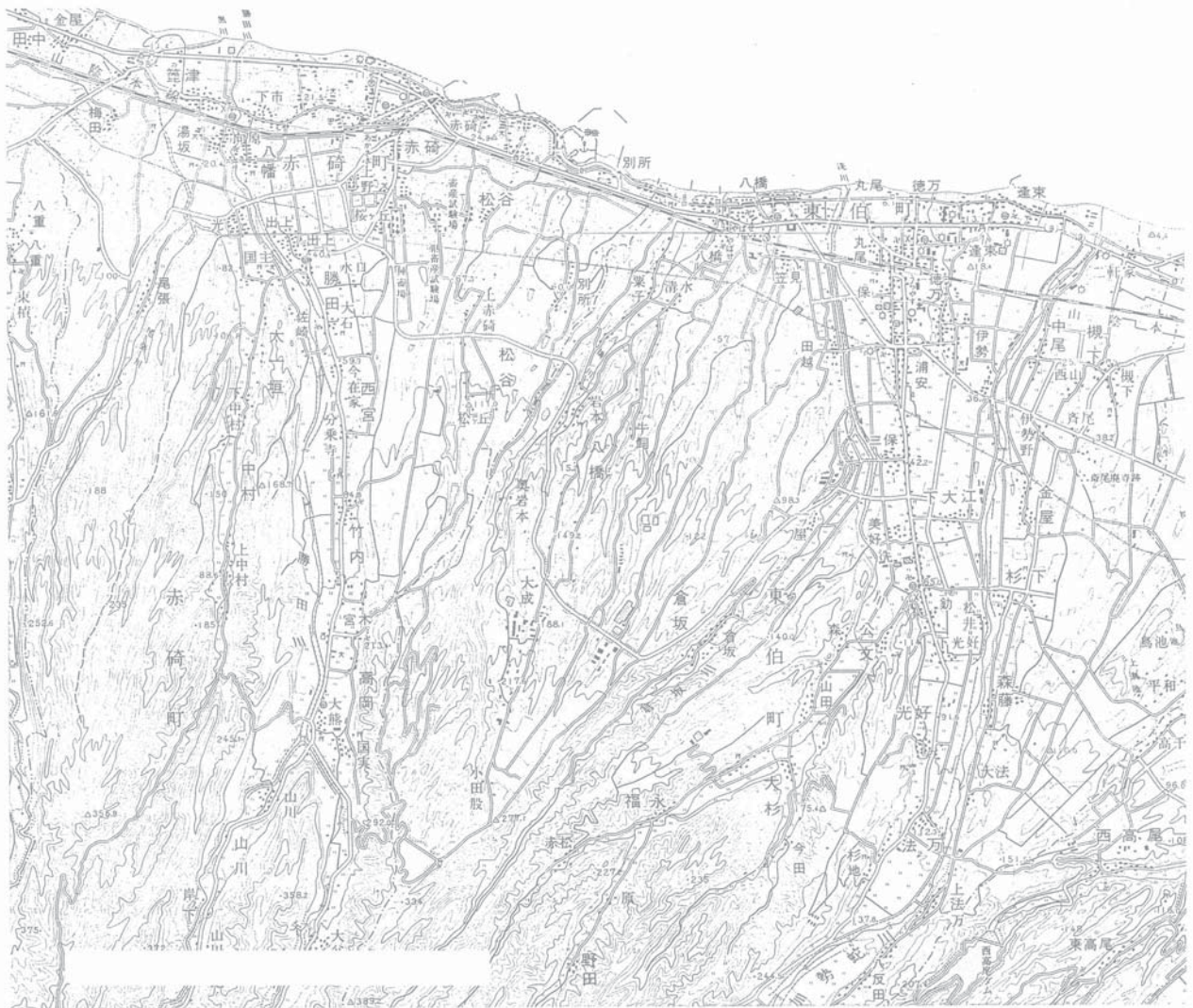
また、弥生時代の祭祀に特徴的な銅鐸が、県中部では6遺跡で計7口見つかった。当該地域では、八橋南方丘陵上(58)で銅鐸（扁平鈕Ⅰ式）が1口見つかった。また、田越南方丘陵上(53)では、出土状況は明らかではないが、箱式石棺の下から中細形銅剣が4口、久蔵峰(59)で銅矛が1口出土している。八橋地区を中心とする地域は、銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土しており、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態があったものとして興味深い。

古墳時代 古墳時代に入ると大型前方後円墳が各地に出現する。当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所1号墳（笠取塚古墳）(65)は、撥型に開く前方部等の特徴から前期に遡る可能性がある。中期から後期になって前方後円墳が築造され、八橋狐塚古墳(62)、笠見1号墳(55)、竜ヶ崎3号墳(50)がある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになり、大高野古墳群(32)、塚本古墳

群(33)、斎尾古墳群(34)、公文古墳群(47)、竜ヶ崎古墳群、別所古墳群(66)、笹津古墳群(76)、坂ノ上古墳群(75)、梅田古墳群(74)などがある。また、後期以降、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法3号墳(43)や三保6号墳(52)、大柴町上種東3、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群(28)、塚本古墳群、大高野古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。大高野3号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下5号墳（代々1号墳）では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田1号墳(48)や出上岩屋古墳(69)は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、丘陵上に営まれる三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、八橋第8・9遺跡(13)、松谷中峰遺跡(15)、別所中峯遺跡(14)などの他、低地部分でも小規模ながら中尾第1遺跡、上伊



道東山西山遺跡、9. 久蔵谷遺跡、10. 久蔵峰北遺跡、11. 蝮谷遺跡、12. 岩本遺跡、13. 八橋第8・9遺跡、14. 別所中峯遺跡、15. 松谷中峰遺跡、16. 化粧川遺跡、17. 福留遺跡、18. 八幡遺跡、19. 南原千軒遺跡、20. 湯坂遺跡、21. 笹津乳母ヶ谷第2遺跡、22. 梅田所在遺跡、23. 梅田萱峯遺跡、24. 逢東双子塚古墳、25. 逢東遺跡、26. 逢東第2遺跡、27. 槻下豪族居館跡、28. 槻下古墳群、29. 下斎尾2号遺跡、30. 水溜り・駕籠掘場遺跡、31. 大高野遺跡、32. 大高野古墳群、33. 塚本古墳群、34. 斎尾古墳群、35. 下斎尾1号遺跡、36. 斎尾廃寺、37. 伊勢野遺跡、38. 金屋経塚、39. 森藤第1・2遺跡、40. 大峰遺跡、41. 西高尾谷奥遺跡、42. 大法古瓦出土地、43. 大法3号墳、44. 上法万経塚、45. 杉地古墳群、46. 下光好古墳群、47. 公文古墳群、48. 山田1号墳、49. 妙見山城跡、50. 竜ヶ崎古墳群、51. 三保遺跡、52. 三保6号墳、53. 田越銅剣出土地、54. 田越第4遺跡、55. 笠見第2遺跡、56. 笠見第1遺跡、57. 八橋城跡、58. 八橋銅鐔出土地、59. 久蔵峰銅鐔出土地、60. 八橋第2遺跡、61. 八橋第4遺跡、62. 八橋狐塚古墳、63. 別所男女岩峯遺跡、64. 別所2号墳（別所尻古墳）、65. 別所1号墳（笠取塚古墳）、66. 別所古墳群、67. 墓ノ上遺跡、68. 松ヶ丘遺跡、69. 出上岩屋古墳、70. 太一垣城跡、71. 太一垣古墳群、72. 大仏山城跡、73. 山川城跡、74. 梅田古墳群、75. 坂ノ上古墳群、76. 笹津古墳群、77. 笹津城跡

第3図 琴浦町主要遺跡位置図

古代 日本で最初に仏教寺院が建立されてから約1世紀後の7世紀後半以降、山陰地方で仏教文化受容の痕跡が認められる。現在県内では22ヵ所の古代寺院が見つまっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残し、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている斎尾廃寺(36)は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っている。塑像片・仏頭・鷗尾・鬼瓦の他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものが出土し、山陰・山陽では数少ない瓦当文様をもち、畿内と結びつきの深い有力豪族が斎尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。大高野遺跡(31)では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉と考えられ、郡衙推定地もその周辺に比定されている。その周辺の伊勢野遺跡(37)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つまっているほか、大法に古瓦出土地(42)がある。加勢蛇川下流右岸域は、伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと推察される。その他、八幡遺跡(18)では、掘立柱建物跡、赤色塗彩土師器が多く認められている。

平安時代では、上伊勢第1遺跡で、規格性のある大規模な畠跡が見つまっている他、中道東山西山遺跡(8)では小規模な鍛冶施設があり、農耕、集落内鉄器生産の様相を窺うことができる。笠見第3遺跡、三林遺跡では、専用器を用いた火葬墓が検出されている他、当該期末になると末法思想が広まり、金屋(38)と法万(44)でも経塚が作られ、金屋では銅経筒が出土している。

中世 律令体制の崩壊とともに封建制社会が形成される。井岡地頭遺跡では、平安時代末頃の「コ」字状の方形区画溝があり、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。また、『伯耆民談記』に「岩野弾正坊居す」と記された、槻下館跡(7)がある。台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ2mの土塁が築かれている。南原千軒遺跡では、大規模な溝内から大量の鉄滓が出土している他、整然と並ぶ掘立柱建物や和鏡を副葬した土壇墓が検出されており、公の施設の可能性がある。その他、町域西側海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の「赤碕塔」が、6基確認されている。

船上山には、鎌倉時代末の戦乱期に、後醍醐天皇が隠岐島から逃れる際に立て籠もった国史跡行宮跡がある。その他中世城館が各地に見られ、南北朝時代には、行松氏によって築造されのちに尼子・毛利氏の支配下となり、伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡がある。また大杉には南条氏の出城である妙見山城跡(49)、笠津には、土塁と堀を持つ笠津城(槇城)(77)がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城(70)、大仏山城(72)、山川城跡(73)などがあり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城攻撃に参与した城と考えられている。

近世 江戸時代前期、寛永14年(1637年)の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」の文字がみられることから、逢束はこの時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれ、現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。(牧本)

【参考文献】

- 赤碕町編 1974『赤碕町誌』
 東伯町編 1968『東伯町誌』
 鳥取県教育委員会 2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会
 鳥取県埋蔵文化財センター 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター
 内藤正中・真田廣幸・日置桑左エ門著 1997『県史31 鳥取県の歴史』(株)山川出版社
 坂詰秀一編 2003『仏教考古学辞典』(株)雄山閣
 発掘調査報告書類については割愛させていただいた。

第3章 久蔵谷遺跡の調査

第1節 遺跡と調査の概要

久蔵谷遺跡は、大山山系から放射状に派生する丘陵の北東端、標高55～64mの高さに位置する。大山は第四期更新世に形成された安山岩～デイサイトの火山であるが、その活動は約1万数千年前を最後に停止する。久蔵谷遺跡が位置する丘陵は、おもにこの大山からの降下テフラが堆積した台地状の地形である。また、久蔵谷遺跡の東西には比高差30～39mの谷があり、その谷を挟んで東200mの距離には中道東山西山遺跡が位置し、西70mには久蔵峰北遺跡が隣接する。

久蔵谷遺跡の調査地の地形については、上述のように遺跡の東西側は急勾配に谷部へと続くが、尾根筋には幅20mほどの傾斜の緩い平坦面が存在する。この平坦面は調査地中央の鞍部に分断され、南側と北側に認められるが、久蔵谷遺跡で確認された遺構は、この平坦面及びその縁辺で検出されている。

調査前の状況としては、調査地西側では調査に伴う樹木伐採等の重機搬入による攪乱が認められたが、遺跡周辺では植林が行われているものの、調査地内の植生は雑木林化していたため、近年の土地の改変は少ないと考えられた。調査でも上記の攪乱のほかは人為的な土地の改変は認められない。しかし、調査地北側では表土下の地層は、かなり流失している状態であった。

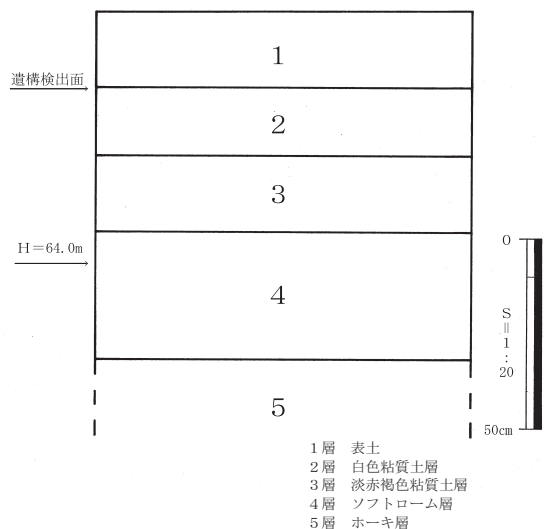
さて、久蔵谷遺跡の土層堆積状況であるが、先述したように大山が噴出した降下テフラを主体とするものである。調査地南側では表土下にソフトロームの2次堆積層が認められ、この層を遺構検出面とした。この2層よりも下の状況は、ソフトロームの2次堆積層である淡赤褐色粘質土層、ソフトローム層、ホーキ層が続く。また、第4図では触れていないが、ホーキ層よりも下の層序はAT層（始良 Tn 火山灰層）、白色粘質土層、淡赤褐色粘質土（ハードローム）層、DKP（大山倉吉パミス）層が認められる。また調査地北側では、表土下にホーキ層が堆積する状況であり、南側で認められたソフトローム層は流失により見受けられず、調査区縁辺部の斜面にソフトロームの2次堆積層が残存する状況であった。

久蔵谷遺跡の調査では、竪穴住居跡2棟、土坑6基、段状遺構1基、溝状遺構1条、ピット3基が検出された。このうち竪穴住居跡2棟は焼失住居、土坑4基は製炭土坑であった。

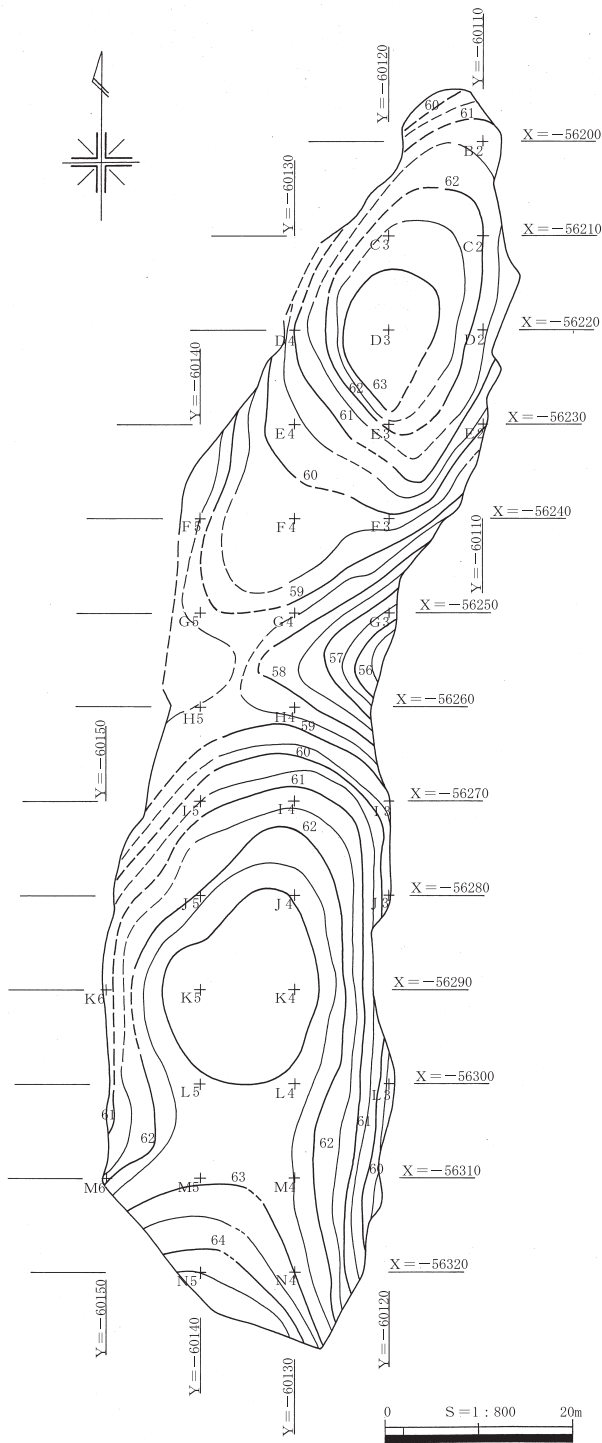
これらの遺構では、土器等の出土遺物はSI2、SS1を除き、ほとんど認められなかった。SI2、SS1で認められる土器は古墳時代前期初頭頃のものである。他の遺構で出土した土器の細片も時期が窺えるものは古墳時代前期頃と思われる。

このほか表土中からも土器の出土は認められたが、古墳時代前期頃のものが多く、それ以外の時期では須恵器の細片が2点見られた程度である。

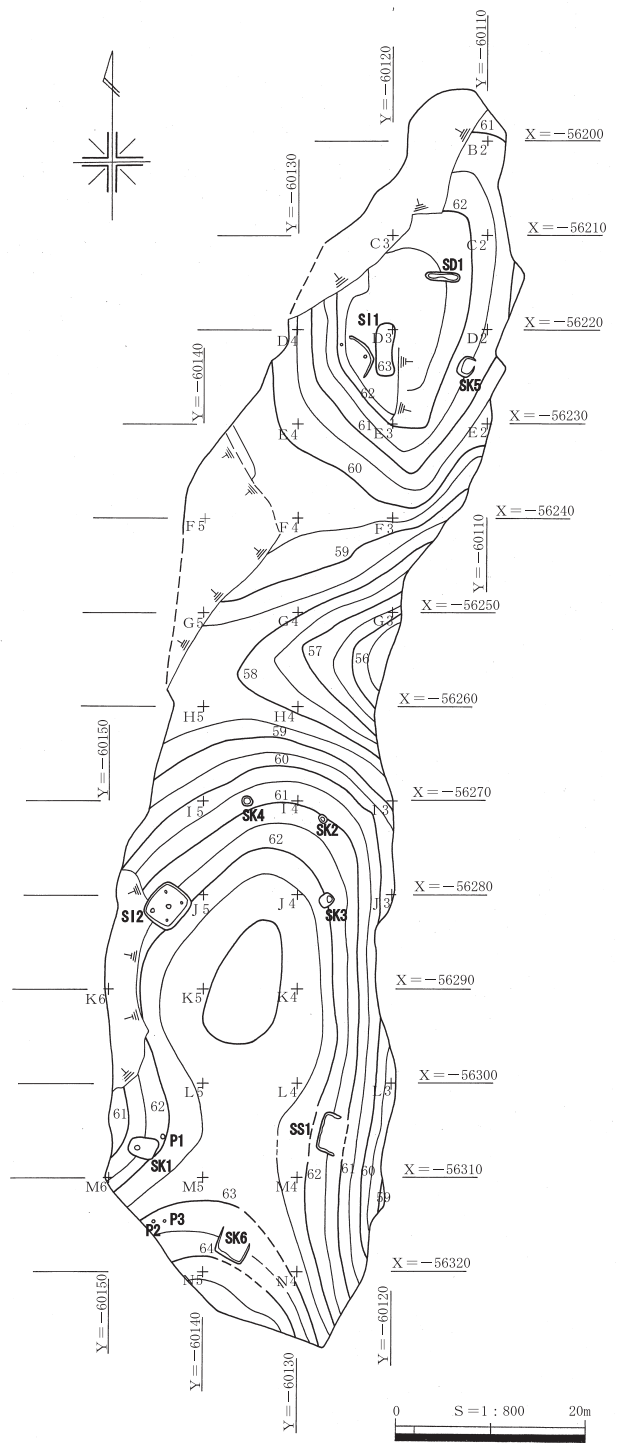
また、製炭土坑4基は出土炭化材を放射性炭素年代測定分析したところ5世紀末から6世紀中頃の年代が推定された。
(野口)



第4図 基本層序



第5図 調査前地形測量図



第6図 調査後地形測量図

第2節 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SI1 (第7・8図 PL.1)

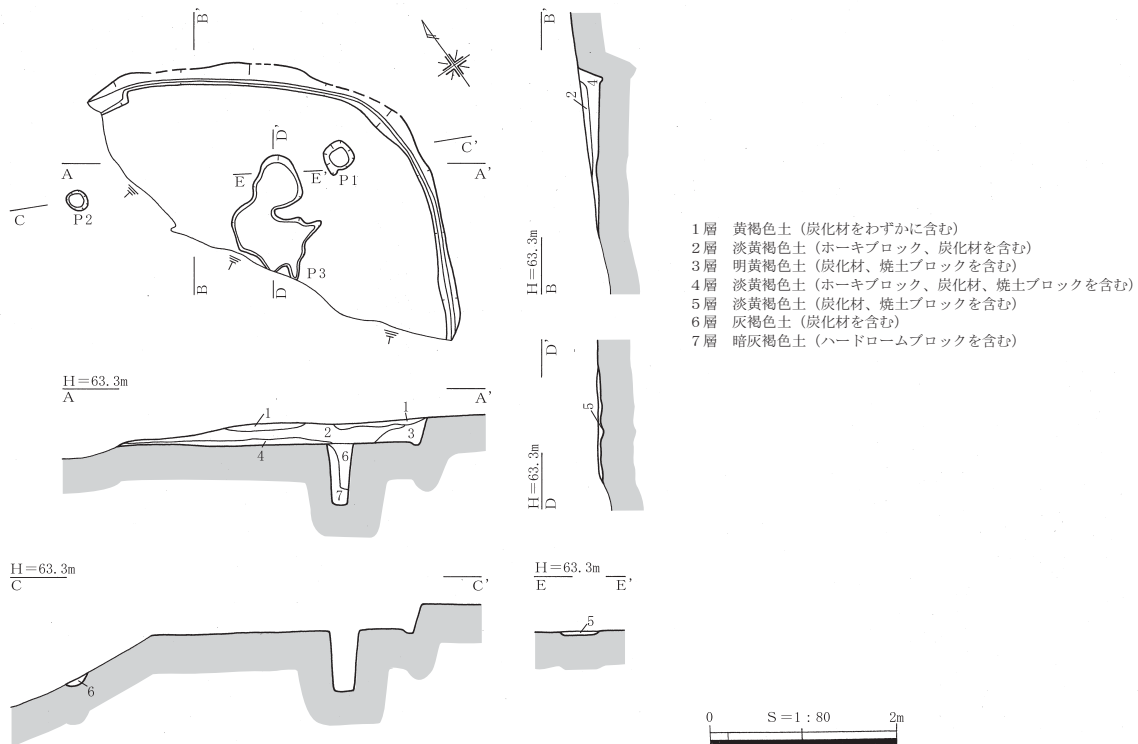
本住居跡はD3グリッド、調査区北側の平坦面南西端に位置するが、北壁から東壁にかけて、住居の3分の1程度が遺存するのみであり、住居の大半は流失している。確認できた範囲では、東西1.8m、南北1.3mを測り、平面形は隅丸方形であったと思われる。

本住居跡は、標高63.0mの高さでホーキ層を検出面として確認した。検出面から床面までの深さは

20cmあまりである。床面までの埋土は、ソフトロームを主体とする土で、4層に分層される。いずれの層にも炭化材が含まれており、さらに壁際、及び床面直上に堆積した土には焼土が認められたことから、焼失住居と考えられた。

このことから埋土中の炭化材は、住居の建築部材が炭化したものと考えられる。この炭化材の出土状況は細片が多く、遺存状態は良くないが、材の繊維方向を住居の中央部分に向けた垂木と思われる材も認められた。焼土も埋土中に確認されたが、その広がりや捉えられるところは少ない。

床面では、埋土中に焼土ブロック、炭化材を含む、浅い掘り窪み P3 が中央付近で認められたほか、周壁溝、支柱穴が検出された。周壁溝は遺存する範囲では、幅約10cm、深さ約4cmのものがめぐる。支柱穴は床面で確認されたものは P1 で、床面からの深さは64cmを測る。また、住居跡西側に位置す



第7図 SI1 実測図



第8図 SI1 遺物出土状況図

る攪乱部分では、支柱穴の底部が残存したP2が検出された。埋土は炭化材を含んだ灰褐色土で、P1と共通する。

出土遺物であるが、本遺構からは土師器と思われる土器がわずかに認められたが、いずれも細片であった。

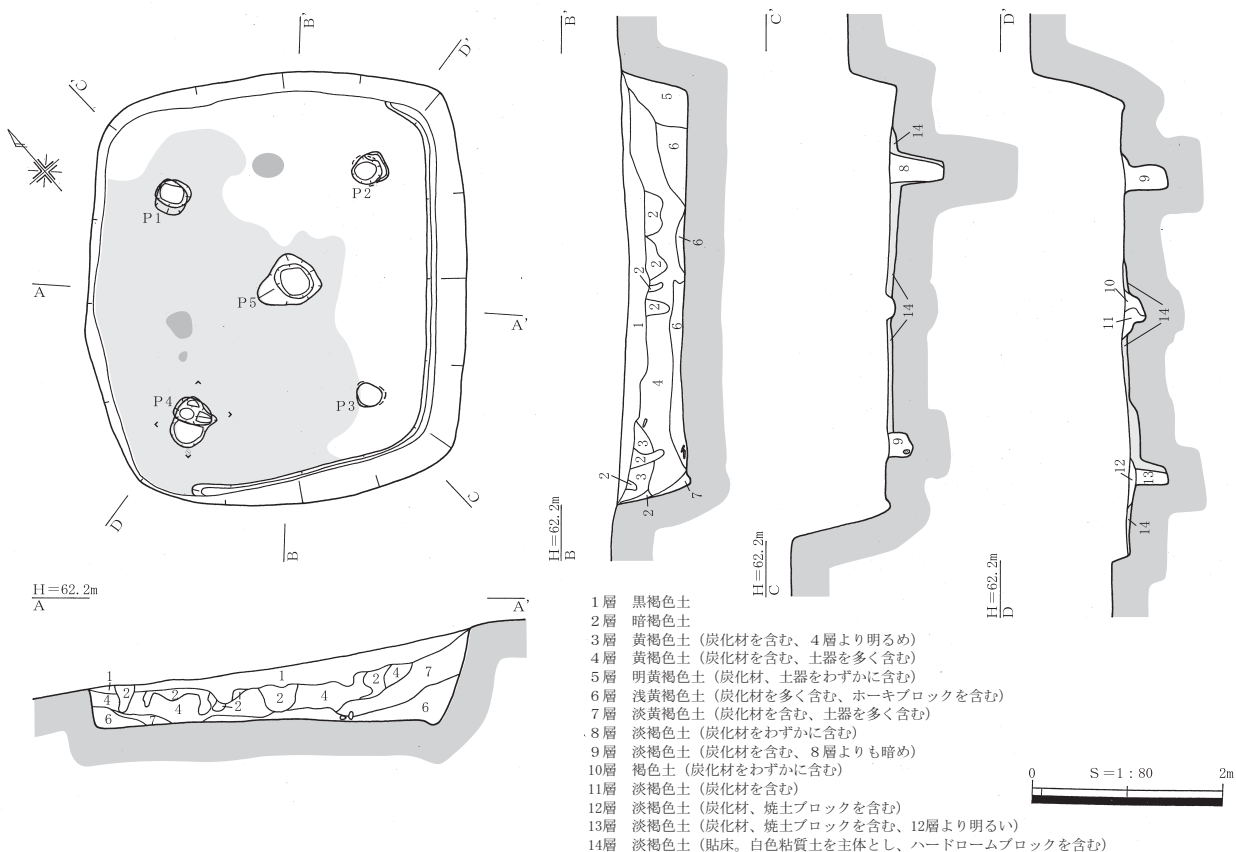
本遺構の時期は出土遺物から具体的にできないが、久蔵谷遺跡で認められた土器の大半が古墳時代前期頃のものであることや、隅丸方形の住居平面形がこの頃に多いことを勘案すると古墳時代前期頃の可能性が高い。
(瀨本)

SI2 (第9～12図 PL.1～3)

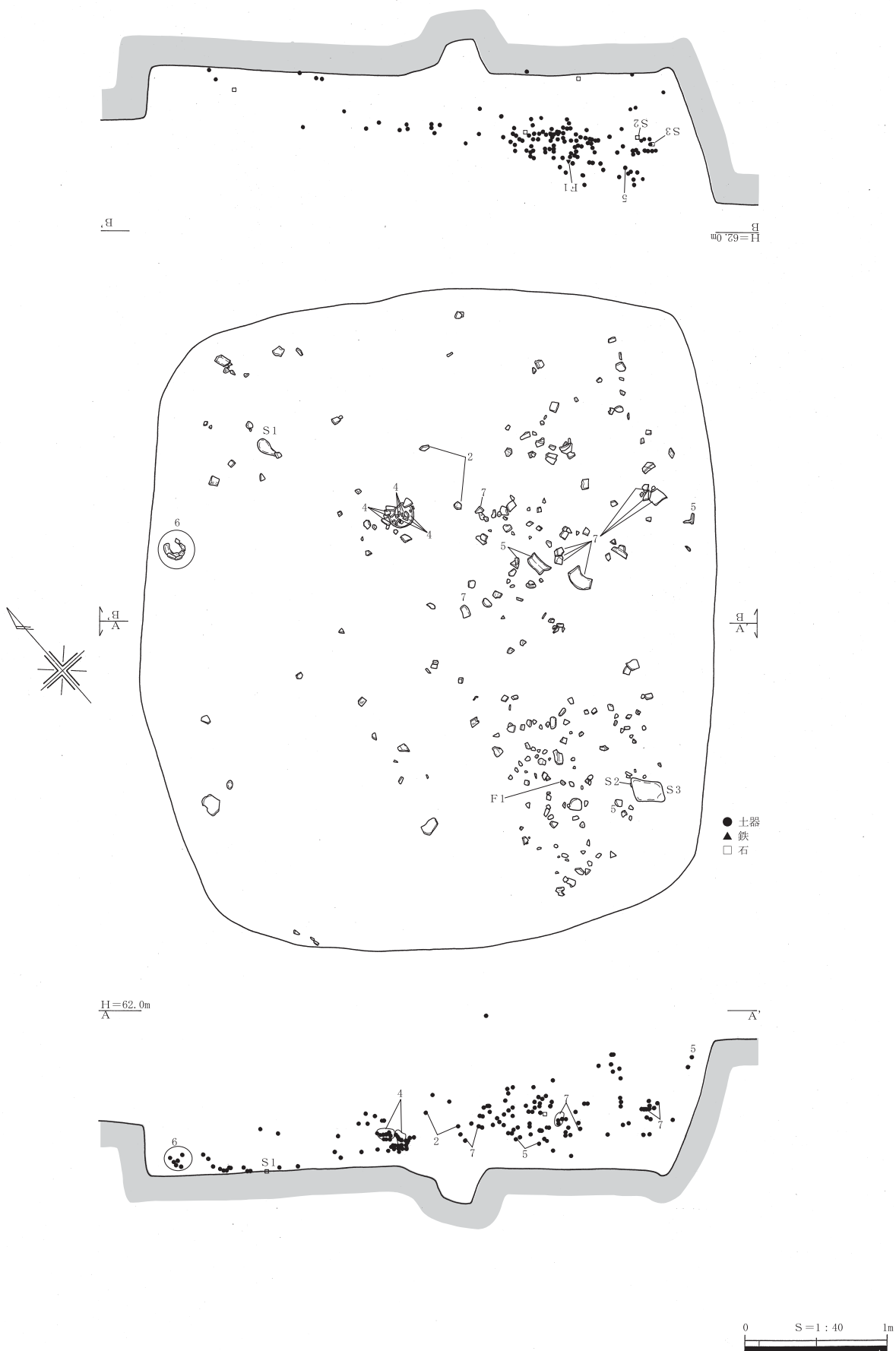
J5グリッドの北東側、検出面での標高61.3～62.0m、調査地南側平坦面の縁辺部に位置する。本遺構の調査前の状況としては、斜面地に立地することから、遺構西側においては、後世の流失、または遺構構築の時点ですでに西側の壁の高さが低かったと思われるが、調査に伴う樹木伐採の重機搬入により削平されている状況であった。また、遺構内には樹木の根の痕が多く認められる状況であったことから、遺存状態はあまり良くないものと予想された。

このような現況を呈したSI2であるが、調査の結果では、住居の遺存状況は東壁で高さが1m以上を測るなど、非常に良いものであった。規模は東西4.0m、南北4.6m、平面形は北東から南西方向に長い隅丸方形である。

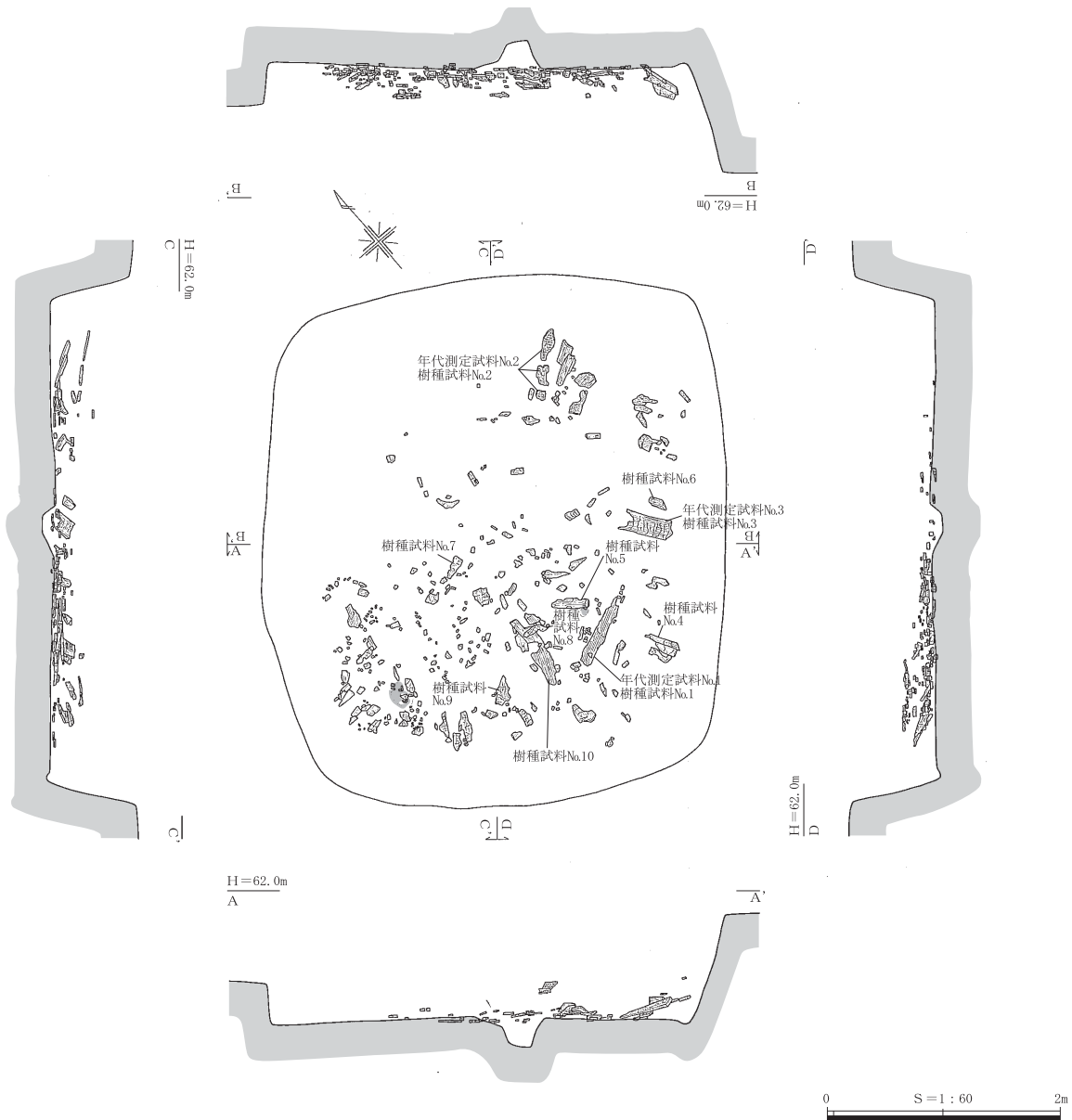
遺構埋土の状況は、検出面から床面までは7層に分層できる。上層の1・2層に関しては上述のように樹木による攪乱等が認められ、土色は3層以下と異なる。また、3層以下の埋土には炭化材が含まれることによっても分けられた。



第9図 SI2実測図



第10図 SI2遺物出土状況図

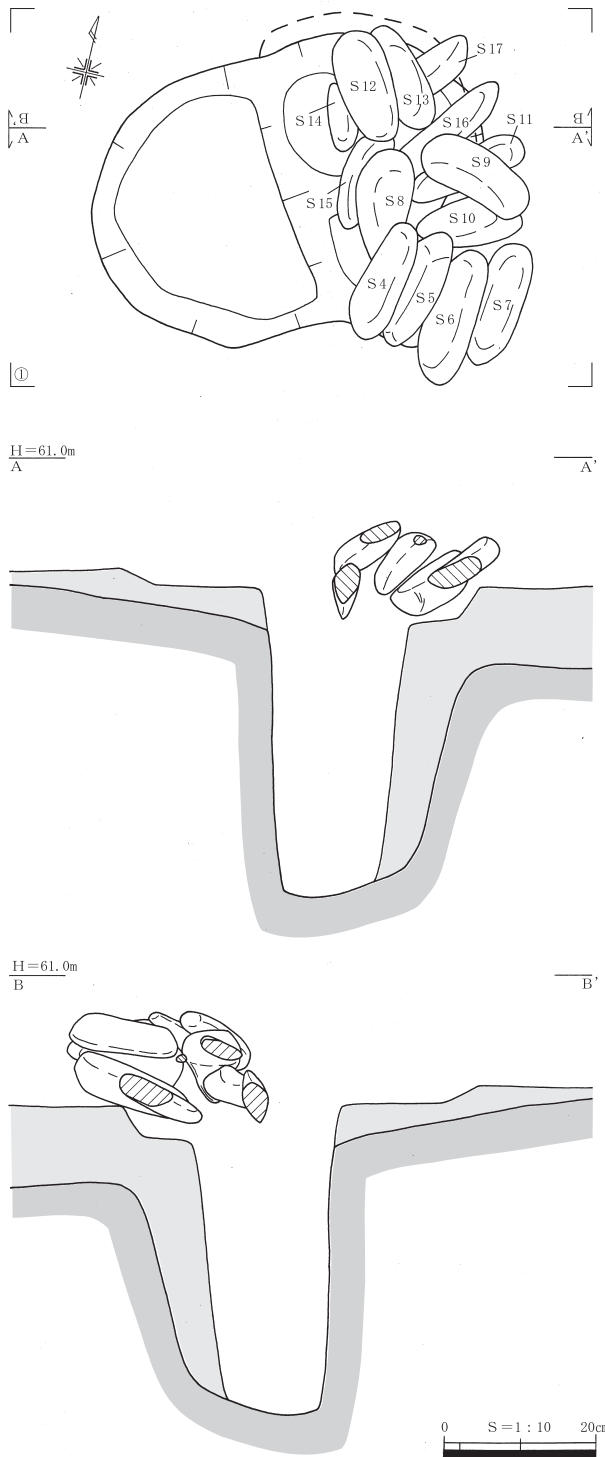


第11図 SI2炭化材出土状況図

3層以下の埋土では、4・7層で土器の細片が多く認められた。出土状況としては住居東側に集中しており、東側から西側にかけて出土高を減じさせながら出土する。

6層では非常に多くの炭化材が出土した。炭化材には厚さ3cmほどの板状の材が多く認められたほか、丸太状の材も認められる。これらの材の出土状況としては、住居北西側ではほとんど遺存しない状況であったが、南から東側にかけては集中して認められた。確認できた炭化材の大半は、材の主軸や繊維方向を住居中央に向けていることから、垂木材であったと考えられる。このほか、P2-3間では住居主軸と方向を同じくする桁材と思われるものも認められた。6層中での出土高は床面直上から上層まで認められる状況である。6層上層のものでは、材が住居中央部に倒れ込んだ状況が窺われる。

このようにSI2は炭化材の出土状況から焼失住居と判断されるが、埋土中に焼土層は形成されず、P4の埋土中にブロック状に認められる程度であった。



第12図 SI2P4 上面集礫検出状況図

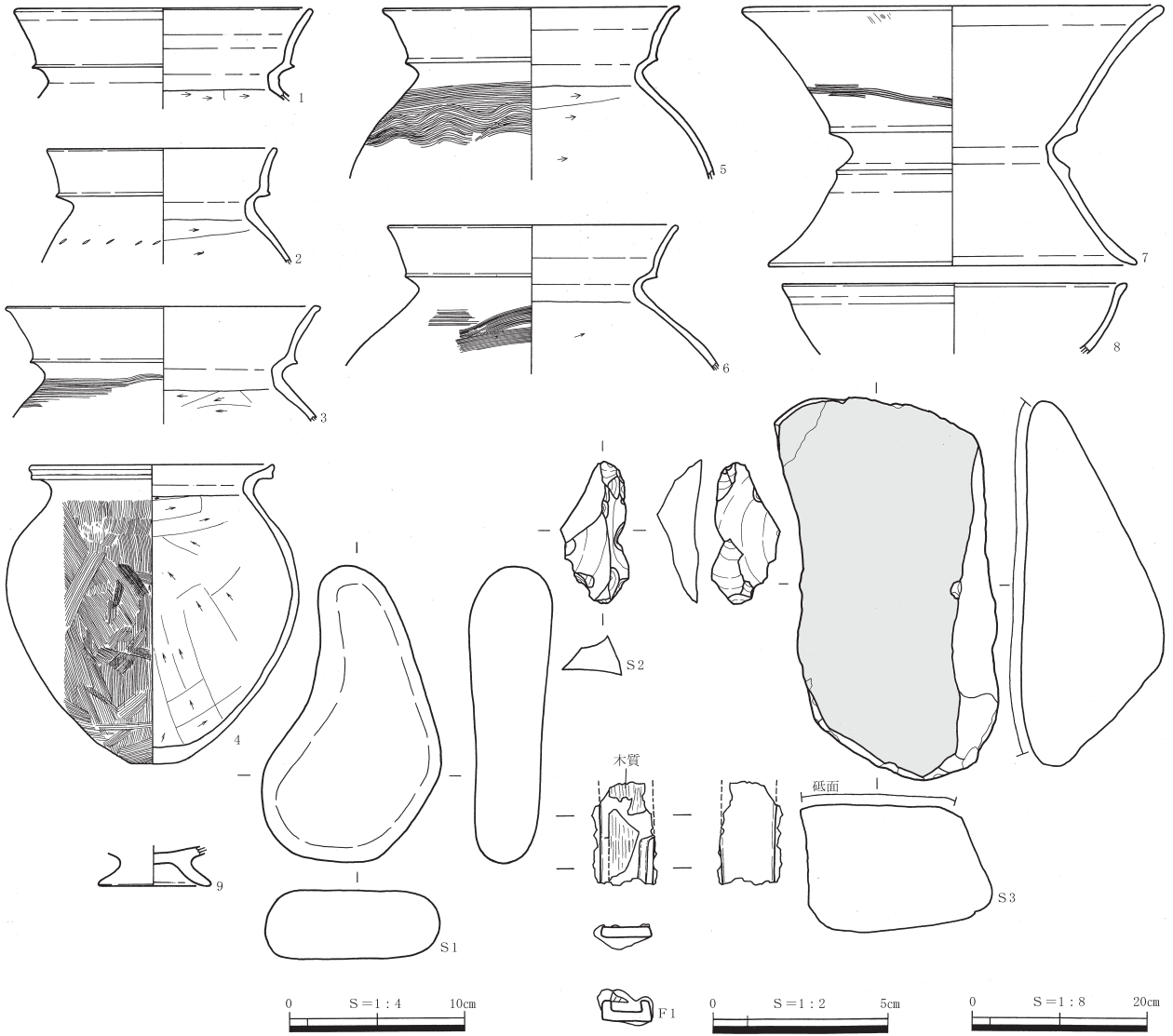
出土遺物であるが、上記のように4・7層を中心に多くの土器片が出土した。1～6は甕である。口縁部は4に沈線が施されるほかは、ヨコナデ調整のみである。肩部では2に刺突文、3・5・6にはハケ目が認められ、5は下半のハケ目を波状にする。4は肩部から底部にわたってハケ調整である。7は鼓形器台で、口径23.5cm、器高14.8cmを測り、受け部外面にはハケ目が付けられる。8は高坏の坏部、9が低脚坏の脚部である。これらは4を除く甕の口縁部がヨコナデ調整になることや、口縁部下端の突出が明瞭であること、4の底部がやや尖り気味で丸底にはなっていないこと、7の器台に器高の縮約化が見受けられないことから天神川編年I期、古墳時代前期初頭のものに相当する。

そのほかS1は、使用痕は認められないが、P1の縁辺部から出土したものである。P4の礫のようにまとまったの出土ではないが、ピットの縁辺部から出土する状況などは共通する。S2は水晶の

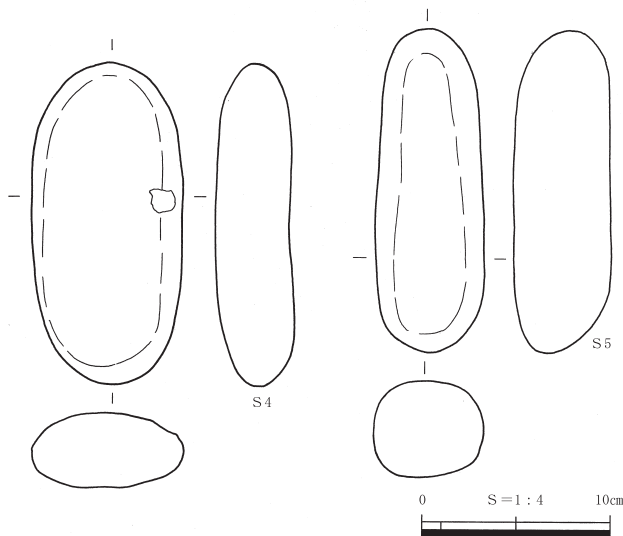
床面は、住居西側部分で白色粘質土にハードロームのブロックを混ぜた貼床が施されており、主柱穴、中央ピット、焼土面、周壁溝が検出された。主柱穴はP1～4で、住居の四隅に配されている。P1・2・4は深さを揃えるが、P3では30cmほど浅い。これはP3の底面が硬質なDKP層にあたるためである。中央には長径65cm、短径50cm、深さ20cmのピットが掘り込まれ、埋土には炭化材が含まれていた。焼土面は住居北側に1ヶ所、西側に2ヶ所、周壁溝は幅12cm、深さ5cmのものが、住居東側から南側にかけてめぐる。

またP4では、その直上から縁辺部にかけて長さ14.7～18.3cm、幅5.7～8.7cm、厚さ4.0～6.2cm、重さ684～1243gの棒状の礫が14個出土した。これらはピットの東側に、部分的に並べ置かれている状況を呈し、柱材の際に置かれていたものと考えられる。平面（第12図）では、ピットの半分ほどを占めるまで礫が認められることから柱材を抜き取った後に置かれた可能性も考えられたが、礫付近でも垂木等の炭化材が出土することから、柱材の抜き取りの可能性は少ない。P4には大きさ10cm程度の柱材が配されていたと考えられる。また、これらの礫はS15の1点に敲打痕が認められるが、他のものには明確な使用の痕跡は認められない。石材は角閃石安山岩、角閃石石英安山岩である。

出土遺物であるが、上記のように4・7層を中心に多くの土器片が出土した。1～6は甕である。口縁部は4に沈線が施されるほかは、ヨコナデ調整のみである。肩部では2に刺突文、3・5・6にはハケ目が認められ、5は下半のハケ目を波状にする。4は肩部から底部にわたってハケ調整である。7は鼓形器台で、口径23.5cm、器高14.8cmを測り、受け部外面にはハケ目が付けられる。8は高坏の坏部、9が低脚坏の脚部である。これらは4を除く甕の口縁部がヨコナデ調整になることや、口縁部下端の突出が明瞭であること、4の底部がやや尖り気味で丸底にはなっていないこと、7の器台に器高の縮約化が見受けられないことから天神川編年I期、古墳時代前期初頭のものに相当する。



第13図 SI2 出土遺物



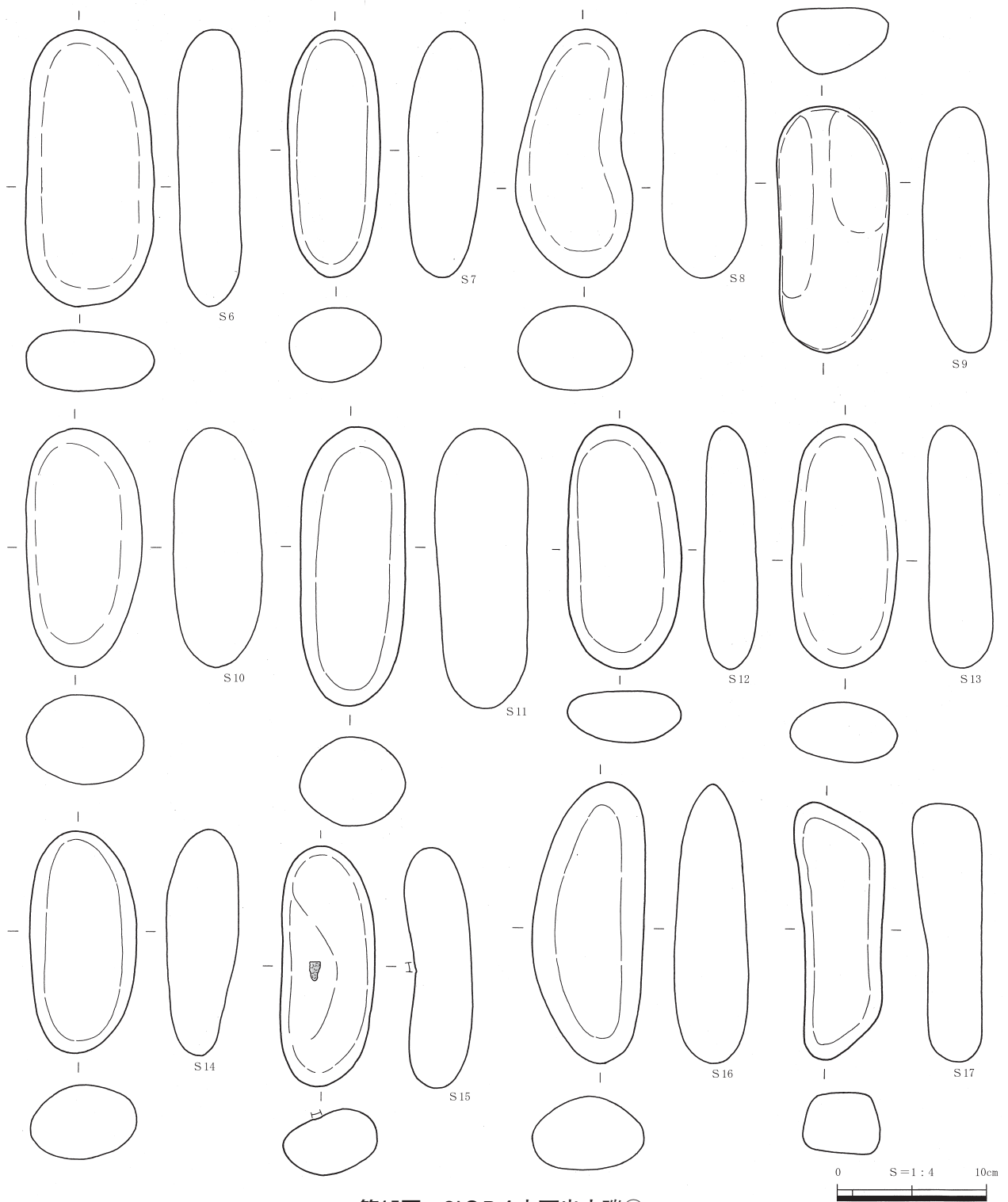
第14図 SI2P4 上面出土礫①

剥片、S3は細粒花崗岩の砥石である。F1は鑿状の工具と思われる鉄製品で、柄の装着部分では側縁を凹状に折り曲げることにより袋部が作り出される。また、袋部の内側には木質も認められる。

以上のような状況を呈したSI2であるが、炭化材や土器などの出土状況からは以下のことが考えられる。

炭化材の出土状況では、前述したように床面直上から6層上層にかけて垂木などの建築部材が認められたことから、6層は住居焼失間の堆積であったことが窺える。また、この

6層の堆積状況は住居の縁辺部が厚く、中央部は薄く認められ、レンズ状に堆積をする。このことから考えると6層は、垂木等の焼失により、崩落した土屋根部分と思われ、土屋根の裾部分を厚くした



第15図 SI2P4上面出土礫②

竪穴住居であったと思われる。

遺物の出土状況では、住居焼失前に片付け等の行為が行われたと思われ、床面直上のものはほとんどない。このことから考えると住居焼失の原因は、突然の失火によるものではなく、放火などによる廃棄行為によったものと思われる。また出土遺物は4・7層を中心に認められるが、4・7層は6層の直上に堆積する層であり、間層を挟まないことから、焼失後の窪地に時間を置かず廃棄されたものと思われる。このことはわずかではあるが認められる床面付近の土器と4・7層の土器の型式が一致することからも蓋然性は高い。

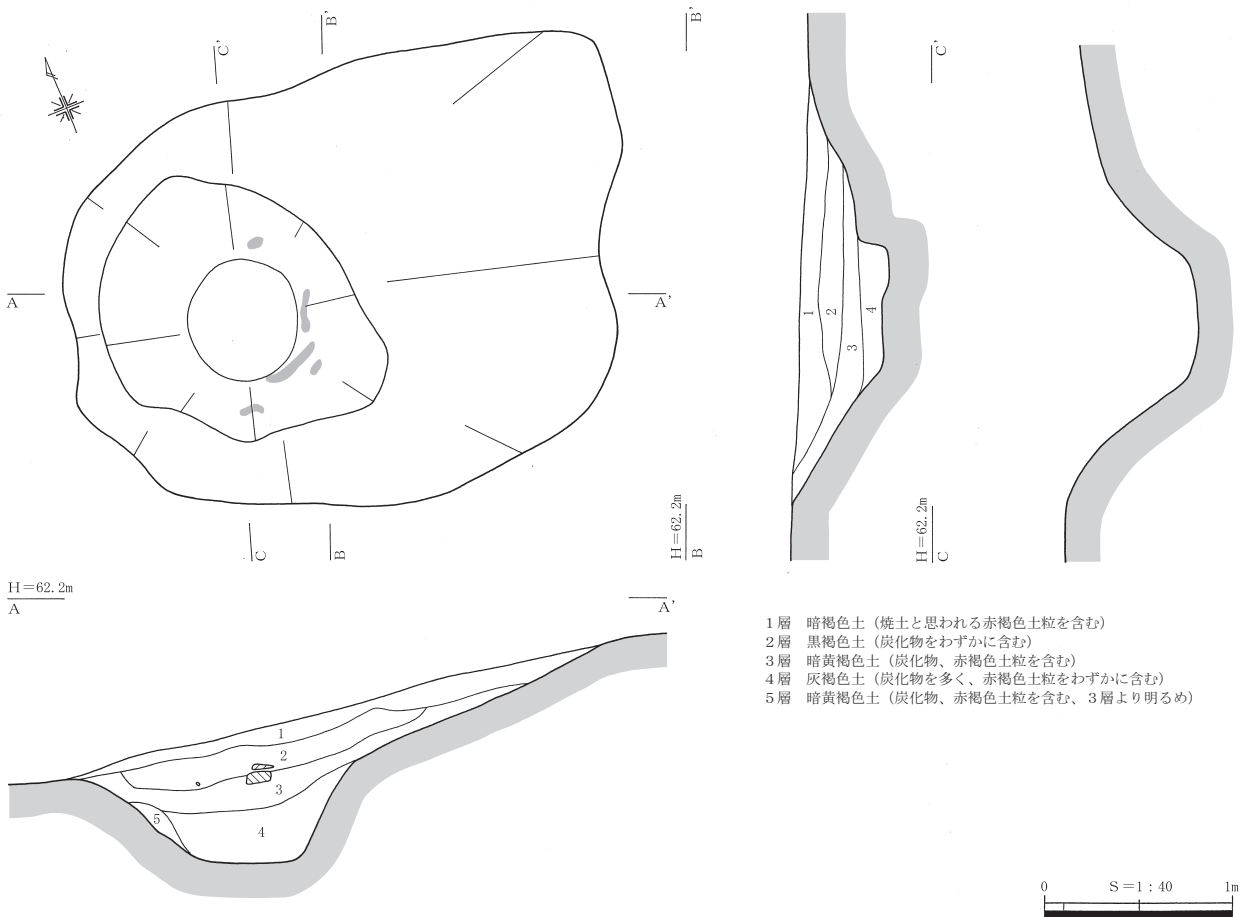
そのほか、SI2の出土炭化材の一部では、樹種同定分析、AMS法による放射性炭素年代測定分析を行った。詳細は第4章で触れるが、分析の結果では、使用されていた建築部材の樹種にはクリとスダジイが認められ、クリの利用が多かったことが確認された。また、年代測定ではBP年代値でおよそ1790~1850年前、2世紀初頭から中頃の年代が測定された。

本遺構の時期であるが、上記のように放射性炭素年代測定の結果からは2世紀初頭から中頃にかけての年代が与えられた。しかし、出土遺物で見た場合、土器などの型式は古墳時代前期初頭頃、実年代では従来の土器研究で3世紀後半頃が考えられる。これらの出土土器は焼失後に廃棄された土器を大半とするが、床面付近から出土する土器と型式を同じくすることや、廃棄の行為が、焼失後早い時期に行われたと考えられることから、出土土器が示す年代と、本遺構の廃絶時の年代では大きな差はみられないと思われる。よって実年代については問題を残すが、古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡とする。(野口)

(2) 土坑

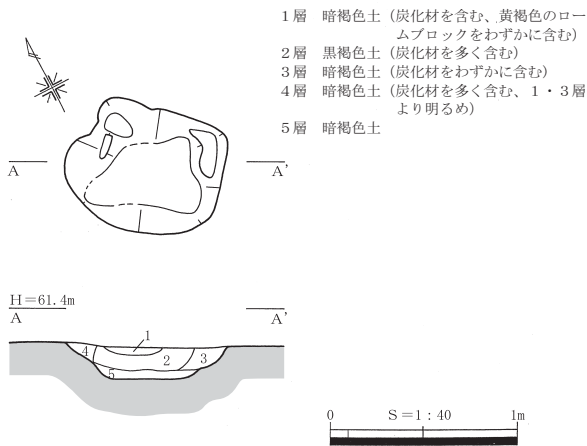
SK1 (第16図 PL.4)

SK1はL5グリッドのほぼ中央、調査地南西側の斜面地に位置する土坑である。標高は61.3~62.0mであり、規模は東西2.9m、南北2.4mを測る。平面形は歪な楕円形を呈すが、土坑西側部分では一段深くする落ち込みが認められ、検出面からの深さは95cmを測る。この落ち込み部分の壁面では、被熱痕と思われる赤化面が数ヶ所で確認された。

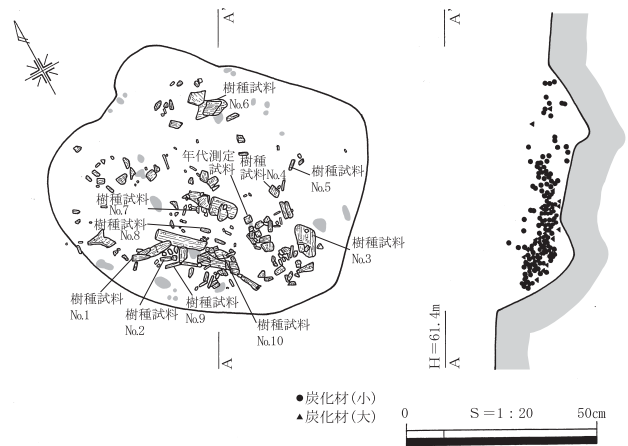


第16図 SK1 実測図

第3章 久蔵谷遺跡の調査



第17図 SK2実測図



第18図 SK2炭化材出土状況図

埋土は土色の違いから5層に分層されるが、これらの層中には、焼土粒と思われる赤褐色土粒や細かな炭化物が含まれる状況であった。堆積の状況としては、レンズ状を呈することから自然堆積による遺構の埋没が考えられる。

時期であるが、出土遺物は埋土上層で土器が数点認められたが、細片であることや、出土層位から本遺構の時期決定を行える資料ではないため不明である。また、性格は明らかでないが、壁面に被熱痕と思われる面が認められることや、埋土中にも焼土粒や炭化物が認められることから、本遺跡で確認されている製炭土坑の可能性もある。(野口)

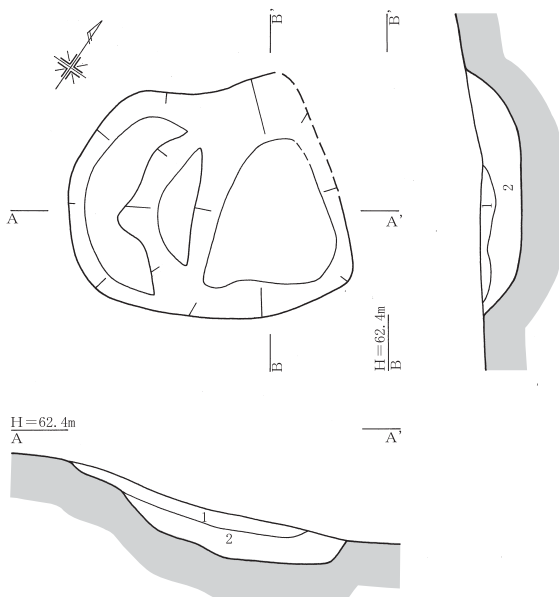
SK2 (第17・18図 PL.4・5)

SK2はI3グリッドの北西側、調査地南側平坦面の北東側縁部、傾斜角11度ほどの斜面地に位置する土坑で、標高は61.3mの高さにある。規模は長軸84cm、短軸65cmを測る。平面形は不整な円形で、検出面からの深さは18cmを測る。

埋土は、土色、混入物で5層に分層されるが、底面に堆積する5層を除いて、炭化材が含まれる状況であった。炭化材の出土状況は第18図の通りで、遺構南半部に多く認められ、出土する層位は2層を中心とする。この炭化材は、遺存状態の違いから長さにはばらつきは見られるが、幅3～5cm、厚さ1cm程度の角状のものと、径1cm程度の小枝状のものが認められる。出土高は、本遺構が斜面地に立地することから第18図では不明瞭なところもあるが、調査の所見としては角状の材よりも上位に小枝状の材が位置する傾向であった。

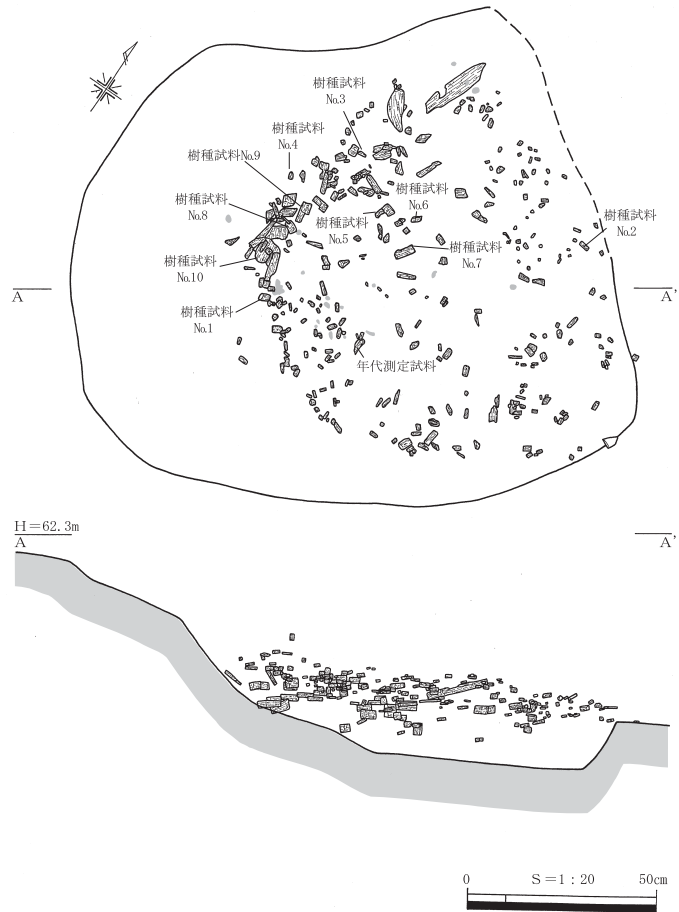
上記のような状況を呈したSK2であるが、土坑の形態や、埋土中に炭化材が多く含まれる点など、近年、県内でも調査例(大野哲二他『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』鳥取県教育文化財団2004、高尾浩司他『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団2005)が増加しつつある製炭土坑との類似が認められる。しかし、遺構内に被熱痕は認められなかった。

ここでは、従前に製炭土坑として扱われているものにも被熱痕を伴わないものが含まれることから、本遺構も製炭土坑として位置づけることとする。その場合、本土坑の形態は円形状に掘り込んだだけのものであり、特に焚口等の施設も見受けられないことから、簡易的な製炭技術として現在も見る「穴焼き法」と類似したものと考えられる。穴焼き法とは、地面に坑を掘り、下から熾き火、炭材、枝による被覆、土による被覆などの順番で重ね、製炭する技術である(『環境を守る炭と木酢液』炭



1層 褐色土 (炭化材、焼土粒をわずかに含む)
2層 暗褐色土 (炭化材を多く含む、下層には焼土粒が多く含まれる)

第19図 SK3実測図



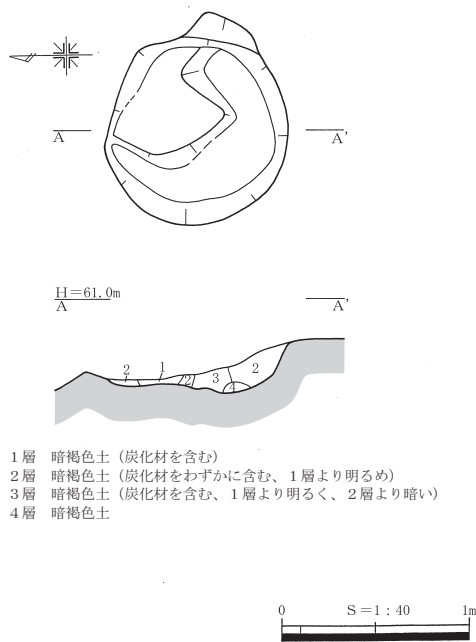
第20図 SK3炭化材出土状況図

やきの会1991)。さらにSK2で出土した炭化材には角状の材と小枝状の材が認められ、角状の材よりも上位に小枝状の材が位置する出土状況は、穴焼き法の炭材と被覆材との位置関係に対応する可能性もある。この場合、製炭された材は土坑内から取り出されなかったことが前提となるが、本遺構の検出面下の埋土の状況からは特に炭材を取り出したような痕跡は認められなかった。炭材と考えられる炭化材に並べられて製炭されたような状況も認められなかったが、後述する炭材を取り出したと思われるSK4、SK5の製炭土坑とは、明らかに炭化材の出土量が異なる。

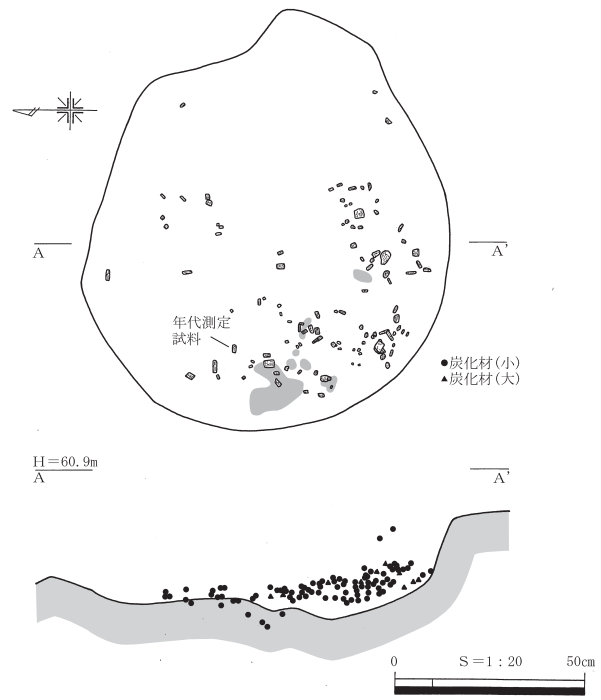
また、本遺構では炭化材以外の出土遺物がなかったことから、考古学的手法による時期決定はできなかったが、出土炭化材の一部で、AMS法による放射性炭素年代測定分析を行った。分析の結果では、年代測定はBP年代値でおよそ1400年前±40年、6世紀中頃を中心とした年代が測定された。また併せて出土炭化材の樹種同定分析も行い、角状の材、小枝状の材ともにスダジイであったことが確認された。(野口)

SK3 (第19・20図 PL.5)

本土坑はJ3グリッドの北側、調査地南側平坦面の北東側縁辺部、傾斜角15度ほどの斜面地に存する土坑で、前述のSK2の約8m南にある。検出面の標高は62.3m、規模は長軸145cm、短軸128cmを測る。現況の平面形は不整な円形を呈するが、炭化材の出土状況からすれば、本来の平面形状はほぼ円形であったと考えられ、西側部分に関しては、土坑の肩部分が崩れたものと思われる。検出面からの深さは20cmを測る。



第21図 SK4実測図



第22図 SK4炭化材出土状況図

埋土は、色調によって褐色土と暗褐色土の2層に分層される。いずれの層にも炭化材、焼土粒が含まれる状況であったが、下層の暗褐色土中に集中して認められる。

炭化材の出土状況は第20図の通りである。先述したように遺構西側については、土坑の肩部分が崩れたものと思われるため、炭化材は認められない。現況の範囲で東側に円形に認められる。

出土炭化材は、SK2同様、角状を呈するものと小枝状のものが認められる。出土高も角状の材よりも上位に小枝状の材が位置する傾向があった。

このようにSK3は、埋土中に焼土粒や炭化材が多く認められる点などから、SK2同様、製炭土坑であったと思われる。また、SK3でも土坑壁面や底面に被熱痕は認められなかった。

以上のようにSK3においても、土坑の形態、炭化材の出土状況から穴焼き法によって製炭が行われていたと考えられる。また本土坑も炭化材以外の出土遺物がなかったことから、考古学的手法による時期決定はできなかったが、出土炭化材の一部で、AMS法による放射性炭素年代測定分析、樹種同定分析を行った。分析の結果は、年代測定はBP年代値でおよそ1410年前±30年、6世紀中頃の年代が測定された。出土炭化材の樹種では、角状の材、小枝状の材ともにスダジイであるなど、ほぼSK2と同じ結果であった。

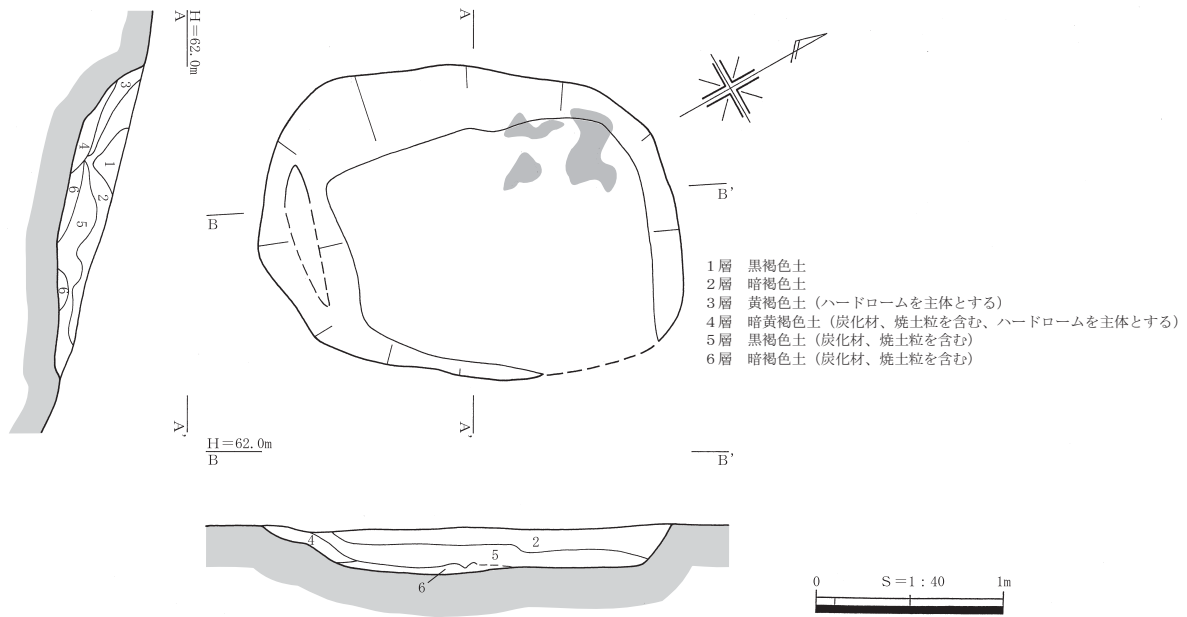
(野口)

SK4 (第21・22図 PL.6)

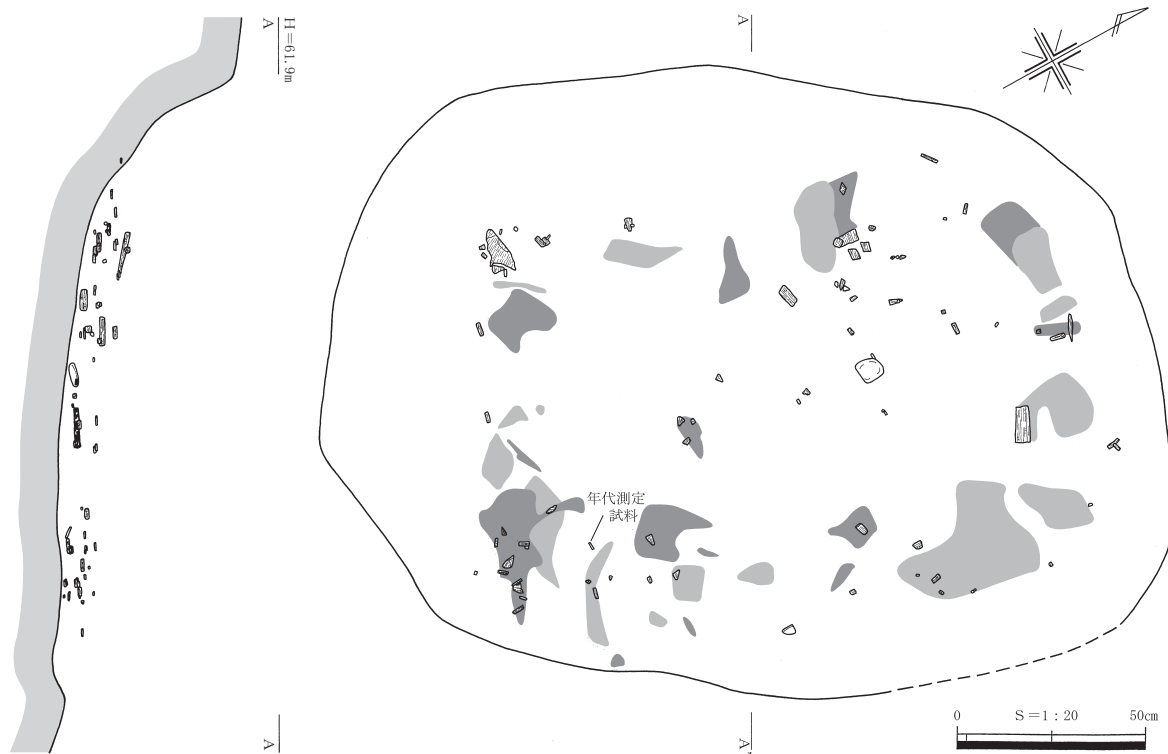
SK4はH4グリッドの南側、調査地南側平坦面から中央鞍部への傾斜角8度ほどの斜面地に位置し、SK2の8mほど西にある。検出面の標高は60.8m、規模は長軸110cm、短軸95cmを測る。平面形は楕円形を呈し、検出面からの深さは15cmを測る。

埋土には暗褐色の土が認められるが、わずかな色調の差、混入物により4層に分層され、1～3層には炭化材が認められる。

炭化材の出土状況は第22図の通りである。SK2やSK3に比べ少量で、土坑西側、3層中に炭化



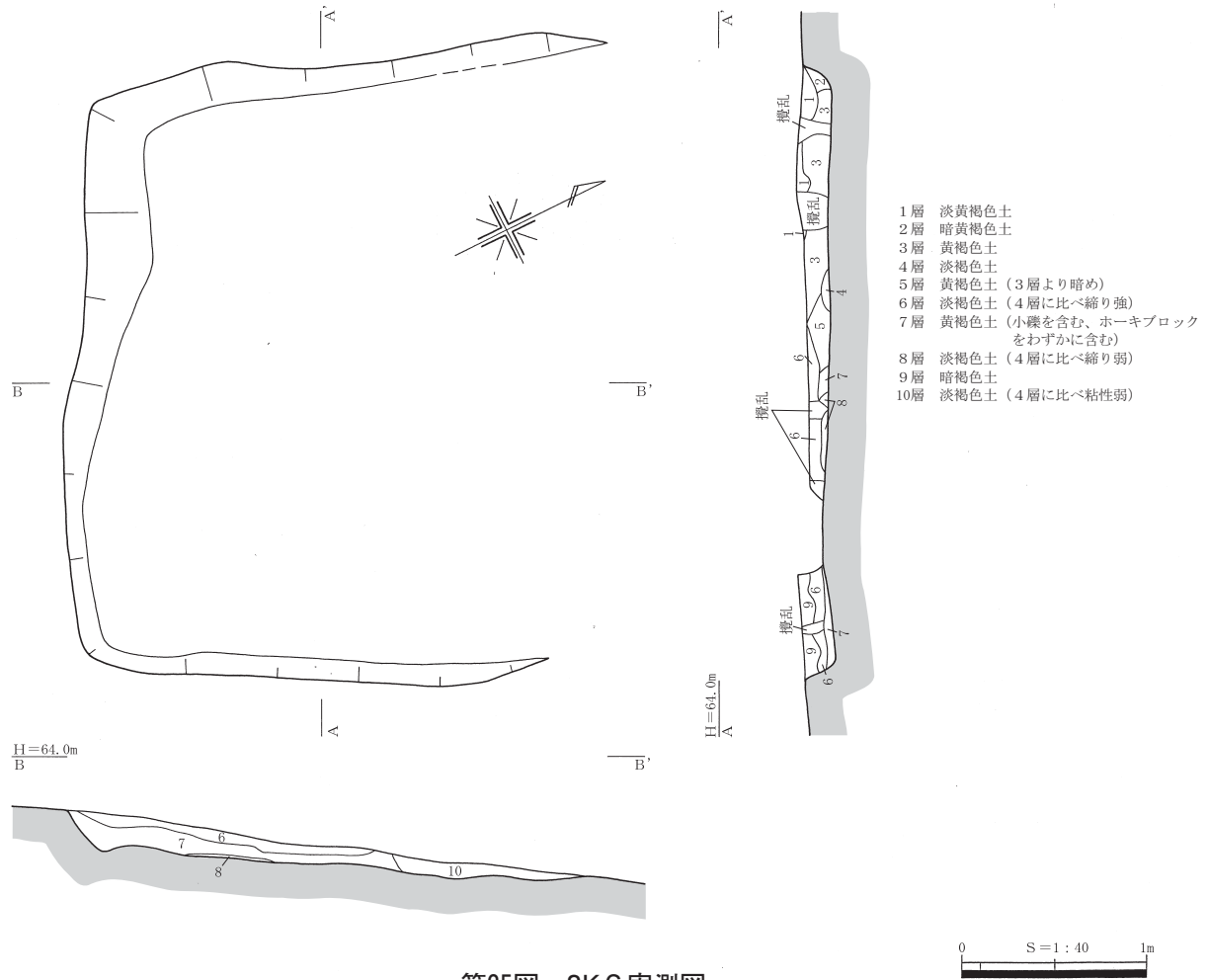
第23図 SK5実測図



第24図 SK5遺物出土状況図

材がややまとまって認められた。ここでも出土炭化材には、角状のやや大きめのものと小枝状のものが確認されたが、SK 2・3 に比べ、細片と化し、遺存状態は良くない。また、出土高も角状の材と小枝状の材で特に違いは見られなかった。そのほか、土坑西側では狭い範囲ではあるが、被熱痕が壁面に認められた。

このようにSK 4 は、SK 2・3 と土坑の形態などは共通するものであったが、埋土中に含まれる炭化材の出土状況に違いが認められた。土坑の形態や炭化材の出土、壁面の被熱痕から、SK 4 も製炭土坑であったと思われるが、炭化材の出土量が少ないことや、角状・小枝状の材で出土高を同じくすることは、製炭された炭材が取り出されたことによるものと思われる。また、本土坑も形態から穴焼



第25図 SK6 実測図

き法によって製炭が行われていたと考えられる。

SK4も炭化材以外の出土遺物が認められなかった。出土炭化材でのAMS法放射性炭素年代測定分析の結果では、年代測定はBP年代値で1440年前±40年、およそ6世紀初頭頃の年代が測定された。(野口)

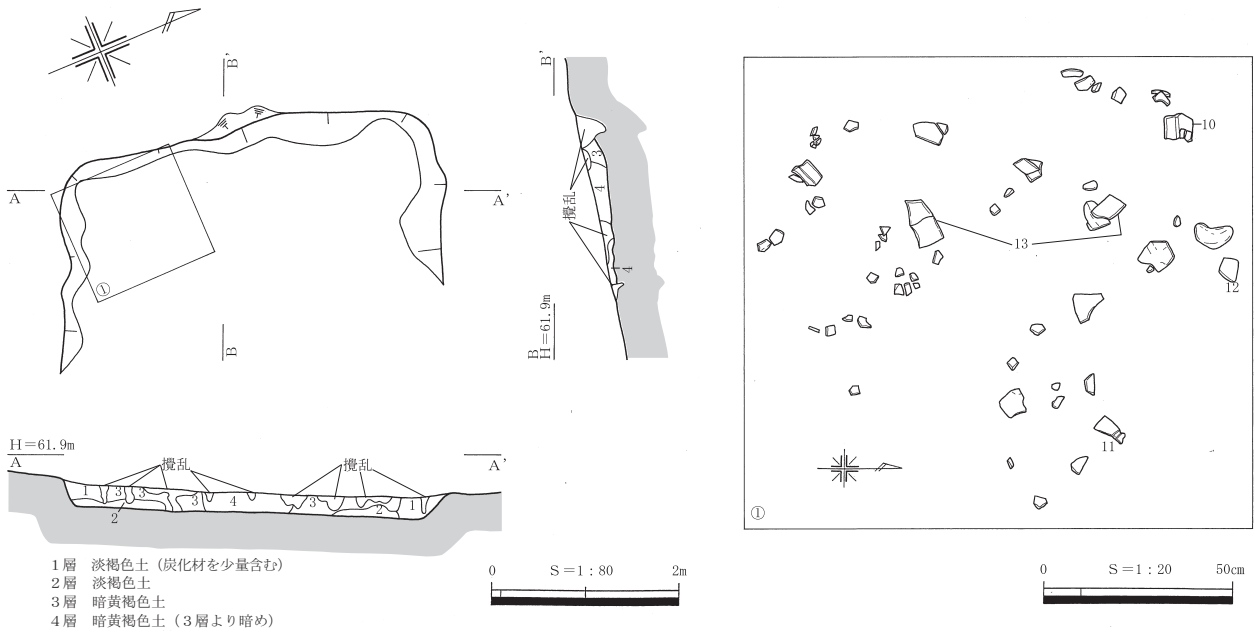
SK5 (第23・24図 PL.6・7)

SK5はD2グリッドの北東側、調査地北側平坦面の東側縁辺部、傾斜角15度ほどの斜面地に位置する。検出面の標高は61.8m、規模は長軸220cm、短軸165cm、深さは25cmを測る。現況では平面形は楕円形を呈するが、炭化材や被熱痕の検出状況から、本来の平面形状は長方形であったと思われる。炭化材や被熱痕の検出範囲は長軸160cm、短軸110cmである。

埋土は色調、混入物により6層に分層され、下層に位置する4～6層に炭化材や焼土が認められる。

炭化材の出土状況は第24図の通りであり、SK4と同様、出土量は少なく、土坑内に散在する状況であった。SK5でもわずかに見られる炭化材に、角状と思われるやや大きめのものと小枝状のものが認められるが、出土高に角状の材と小枝状の材で特に違いは認められなかった。そのほか、土坑壁面の被熱痕は他の製炭土坑と異なり、広い範囲で確認された。

以上のように、炭化材や壁面の被熱痕が認められることから、SK5も製炭土坑であったと思われるが、形態は他の製炭土坑と異なり、長方形の平面形である。しかし、ここでは遺存する遺構内に焚



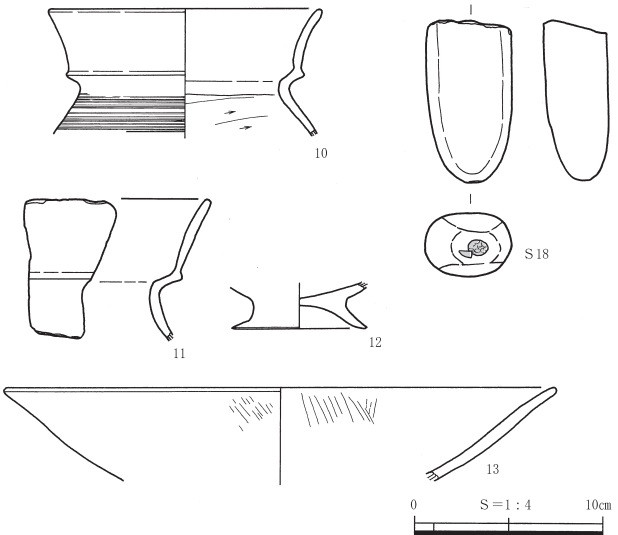
第26図 SS1 実測図

口等の施設を明確に認めることができなかつたことから、製炭法は穴焼き法によるものであったと考える。また SK 4 と同じく、出土炭化材の量が少ないことは、製炭された炭材が取り出されたことによるものと思われる。SK 5 でも、出土炭化材の AMS 法放射性炭素年代測定分析を行い、BP 年代値で1460年前±40年と、およそ5世紀末頃の年代が測定された。(野口)

SK 6 (第25図、PL. 7)

M4 グリッド、標高63.4~63.7mの緩やかな斜面に位置する。遺構の中央部分は試掘調査時のトレンチにあたるほか、北側は壁面・埋土とも流失しており、遺存状態は良くない。確認できた範囲では東西約3.3m、南北約2.7m、平面方形である。検出面からの深さは南側で20cmを測り、底面は平坦であるが、南側から北側に向かってわずかに低くなる。埋土は色調等から10層に分けられるが、堆積の状況から自然堆積で埋没したと思われる。

また調査では、平面形態や底面を平坦にすることから、竪穴住居跡の可能性を考え、底面での遺構検出に努めたが、植物による攪乱以外は確認できなかった。遺物は、南東側の床面付近から土師器と思われる土器の細片が数点出土したが、図化するに至らなかった。時期・性格ともに不明である。(阪上)

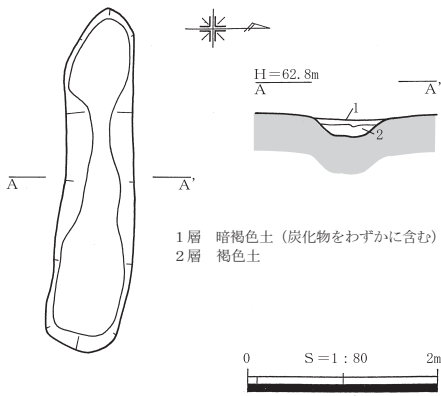


第27図 SS1 出土遺物

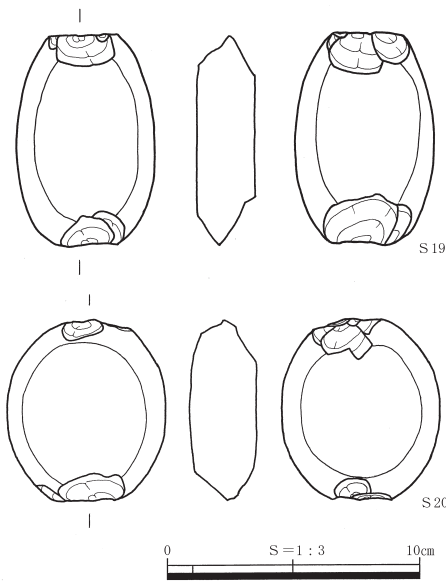
(3) その他の遺構

SS 1 (第26図、PL. 4)

L3 グリッド、標高61.3~61.6mの緩やかな斜面に位置する段状遺構である。本遺構の周辺は風倒木痕等の攪乱が多く、埋土中にも攪乱が見受けられる状況であった。



第28図 SD 1 実測図



第29図 SD 1 出土石器

規模は長さ約4m、幅約1.6m、深さは西側で30cmを測り、主軸を等高線と平行にする。底面は平坦で、北西側ではハードローム層、それ以外の部分では白色粘質土をベースにしている。

埋土は色調等により4層に分層できる。遺物の出土は1・2層を中心とし、遺構の南側で集中する範囲が確認された。また、底面の調査ではピット等の遺構を検出することはできなかった。

出土遺物には、土師器、石器がみられる。10・11は甕の口縁部の破片である。10は口縁部下端の突出度が増し、器壁が薄くシャープである。肩部にはハケ調整が施される。11は口縁端部が平坦面を形成しつつあり、口縁部の立ち上がりが高い。12は低脚杯の脚部である。13は高杯の杯部で、口径は復元値で29.9cmを測るが、本来の口径はこれより小さくなる可能性がある。S18は片側に使用痕を持つ角閃石安山岩製の敲石である。

以上のことから、本遺構の時期は、出土遺物が示す特徴から天神川編年I期、古墳時代初頭頃と推定される。性格については不明である。(阪上)

SD 1 (第28・29図)

C2グリッド北東側、標高約62.0mの緩やかな斜面に位置する溝状遺構である。東西方向に主軸をとり、その走向は直線的である。平面の規模は長さ3.7m、幅70~80cm、深さ5~20cmを測り、溝の断面は逆台形を呈する。

埋土は褐色土と、炭化物をわずかに含む暗褐色土の2層に分層できた。

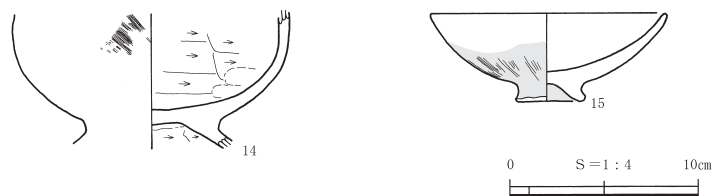
遺物にはS19・20が認められたが、いずれも暗褐色土中からの出土である。S19は長軸両端部を打ち欠いた石錘で、西側底面付近から出土した。角閃石石英安山岩製で、やや縦に長い卵形を呈し、長軸は8.3cm、重さは164gを量る。S20も本遺構の西側から出土した角閃石安山岩製の石錘で、長軸の両端を打ち欠いている。長軸は7.1cm、重さは171gである。遺構の時期を判断できる遺物は出土していないため、本遺構の時期・性格等は不明である。(濱本)

ピット (第6図 表1)

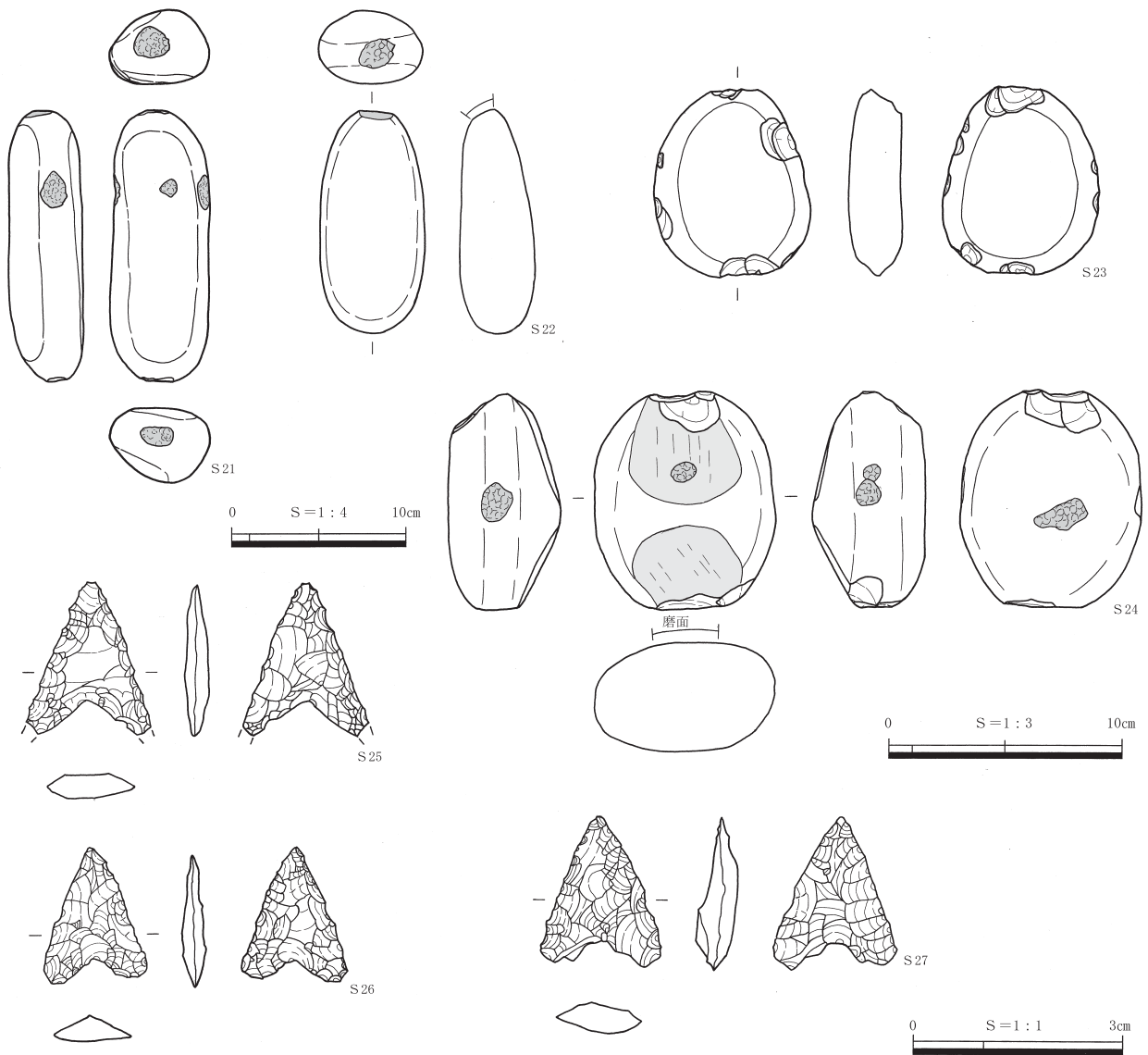
久蔵谷遺跡ではピット状に検出されたものの多くは根攪乱であり、遺構としてのピットは、調査地南側の西斜面に3基が確認された。(野口)

表1 ピット表 (計測値はcm)

番号	長径	短径	深さ	埋土
1	52	46	26	暗灰褐色土
2	28	26	29	淡灰褐色土
3	35	32	25	淡灰褐色土



第30図 遺構外出土石器



第31図 遺構外出土石器

(4) 遺構外出土遺物 (第30・31図 PL.8・10)

久蔵谷遺跡では表土中から土器、石器などの出土遺物がみられた。14は土師器台付甕で、内面はヘラケズリ後ナデ、外面はハケ後ナデ調整である。15は土師器低脚坏である。外面下半部と脚部内面には赤彩が認められる。また、脚端部は破損しているが、その割れ口には赤彩の痕跡がみられる。このことから、破損後、脚端部全体を割って整えた後、赤彩が施されたと思われる。

S21・22は敲石である。S21は表面・両端部・両側面に敲打痕が認められる。S22は上端部にのみ敲打痕がみられる。S23は石錘で、扁平な楕円礫の両端部・両側面を打ち欠いている。S24は敲石及び磨石、石錘として用いられている。表面には磨面が存在し、敲打痕は表裏・両側面に認められる。S25は黒曜石製の凹基無茎鏃である。調整の方向は正面左側縁では基端から先端へ、同右側縁では先端から基端に向かって剥離が行われている。裏面両側縁はともに先端から基端に向かって施されている。基部の抉入部は両面とも内から外に向けての剥離である。S26・27も黒曜石を素材とした凹基無茎鏃である。S26の調整は表裏面とも基部の抉入部、左側縁、右側縁の順に施されている。S27では、基部の抉入部との前後関係は不明であるが、側縁部では表裏面とも左側縁・右側縁の順に施されている。

(阪上)

第4章 自然科学分析の成果

久蔵谷遺跡では、竪穴住居跡と製炭土坑の年代及び出土炭化材の樹種を調べるために、株式会社加速器分析研究所（IAA）、株式会社 パリノ・サーヴェイに依頼し分析を行った。（瀨本）

第1節 久蔵谷遺跡出土炭化材の年代測定

株式会社 加速器分析研究所

【分析方法】

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期5,568年を使用している。
- 2) BP 年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表している。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差（ 1σ ）に相当する年代で、次のように算出している。
複数回（通常は4回）の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として表中に掲載している。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。

$$\delta^{14}\text{C}=[(^{14}\text{As}-^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}]\times 1000 \dots\dots\dots (1)$$

$$\delta^{13}\text{C}=[(^{13}\text{As}-^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}]\times 1000 \dots\dots (2)$$

ここで、 ^{14}As ：試料炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_s$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_s$

^{14}AR ：標準現代炭素の ^{14}C 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{As}={^{13}\text{C}}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算する。ただし、IAA（加速器分析研究所）では加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定しており、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に[加速器]と注記している。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C}=-25.0$ （‰）であるとしたときの ^{14}C 濃度（ ^{14}AN ）に換算した上で計算した値である。（1）式の ^{14}C 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{AN}={^{14}\text{As}} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \text{ (} ^{14}\text{As} \text{ として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき)}$$

または

$$={^{14}\text{As}} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \text{ (} ^{14}\text{As} \text{ として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき)}$$

$$\Delta^{14}\text{C}=[(^{14}\text{AN} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \text{ (}\text{‰}\text{)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 (\text{‰})$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age ; yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC}/100)$$

表2 竪穴住居跡放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-41005	試料採取場所：竪穴住居2 試料形態：木炭 試料名(番号)：662-1 (第11図 No.1)	Libby Age(yrBP) : 1,850±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -24.31±0.61 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -205.9±3.1 pMC(%) = 79.41±0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -204.8±3.0 pMC(%) = 79.52±0.30 Age(yrBP) : 1,840±30
IAAA-41006	試料採取場所：竪穴住居2 試料形態：木炭 試料名(番号)：662-2 (第11図 No.2)	Libby Age(yrBP) : 1,790±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -22.88±0.57 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -199.3±3.1 pMC(%) = 80.07±0.31
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -195.8±3.0 pMC(%) = 80.42±0.30 Age(yrBP) : 1,750±30
IAAA-41007	試料採取場所：竪穴住居2 試料形態：木炭 試料名(番号)：662-3 (第11図 No.3)	Libby Age(yrBP) : 1,840±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -23.20±0.74 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -204.6±3.3 pMC(%) = 79.54±0.33
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -201.7±3.1 pMC(%) = 79.83±0.31 Age(yrBP) : 1,810±30

表3 製炭土坑放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-40862	試料採取場所：土坑2 試料形態：木炭 試料名(番号)：644-1	Libby Age(yrBP) : 1,400±40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -27.58±0.63 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -160.2±3.7 pMC(%) = 83.98±0.37
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -164.7±3.5 pMC(%) = 83.53±0.35 Age(yrBP) : 1,450±30
IAAA-40863	試料採取場所：土坑3 試料形態：木炭 試料名(番号)：644-2	Libby Age(yrBP) : 1,410±30 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -24.51±0.71 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -160.6±3.6 pMC(%) = 83.94±0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -159.8±3.3 pMC(%) = 84.02±0.33 Age(yrBP) : 1,400±30
IAAA-40864	試料採取場所：土坑4 試料形態：木炭 試料名(番号)：644-3	Libby Age(yrBP) : 1,440±40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -25.40±0.62 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -163.8±3.6 pMC(%) = 83.62±0.36
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -164.5±3.5 pMC(%) = 83.55±0.35 Age(yrBP) : 1,440±30
IAAA-40865	試料採取場所：土坑5 試料形態：木炭 試料名(番号)：644-4	Libby Age(yrBP) : 1,460±40 $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ 、[加速器] = -26.00±0.71 $\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -166.2±3.7 pMC(%) = 83.38±0.37
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -167.9±3.5 pMC(%) = 83.21±0.35 Age(yrBP) : 1,480±30

第2節 久蔵谷遺跡竪穴住居出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久蔵谷遺跡は、大山から放射状にのびる尾根の北東端（標高約55–64m）に位置する。発掘調査により、竪穴住居跡、段状遺構、製炭土坑、土坑、溝状遺構等の遺構が検出されている。このうち、竪穴住居跡 SI2 は、焼失住居跡であり、垂木や桁と考えられる炭化材が出土している。これらの炭化材の上層から古墳時代前期の土器が出土している。

本報告では、竪穴住居における住居構築材の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、SI2 から出土した垂木や桁と考えられる炭化材10点（試料番号1–10）である。

2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表4に示す。炭化材は、広葉樹2種類（クリ・スダジイ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2–3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1–15細胞高。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1–2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3–4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

表4 樹種同定結果

遺 構	試料番号	部位	樹 種
SI2 (竪穴住居跡)	1	桁?	クリ
	2	垂木	スダジイ
	3	垂木	クリ
	4	垂木	スダジイ
	5	垂木	クリ
	6	垂木	クリ
	7	垂木	クリ
	8	垂木	クリ
	9	垂木	クリ
	10	垂木	クリ

4. 考察

SI2は、床面が約4.5×4mの隅丸方形～長方形を呈し、四隅がほぼ東西南北方向となる。炭化材は、住居の南側を中心に出土しており、炭化材の軸方向が住居の中央部から放射状にのびる部材と、それに対して直交する部材とがある。前者は垂木、後者は桁の可能性が考えられている。

樹種同定は、住居中央部から南側にかけて炭化材が集中している部分から垂木と考えられる部材8点、桁と考えられる部材1点、住居東側の垂木と考えられる部材1点の合計10点について行った。住居東側の垂木1点はスダジイであった。また、住居中央部から南側の桁はクリ、垂木8点はクリ7点スダジイ1点であった。この結果から、SI2の住居構築材は、クリが多く利用され、そのほかに少なくともスダジイ1種類が利用されていたことが推定される。また、桁もクリであることから、今回の結果をみるかぎりでは、桁と垂木とで木材利用の違いは認められない。

クリは、重硬で強度や耐朽性が高い材質を有する。スダジイも重硬で強度が高いが、耐朽性はクリに比較すると低い。材質面からみれば、住居構築材は強度の高い木材を選択していることが推定される。ただし、今回の試料数は、住居全体の部材数に比較すればはるかに少ない。また、強度の高い木材は、火災の際に燃え残りやすいことが推定される。したがって、クリやスダジイ以外の種類も利用されていた可能性がある。

SI2は、床面上からの遺物の出土がほとんど認められず、火災前に片づけられた可能性が考えられている。一方、炭化材の上層からは古墳時代前期の土器が出土しており、少なくとも古墳時代前期以前に構築されたことが推定される。本遺跡周辺では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての住居構築材について樹種同定を行った例がほとんどないため、当該期の木材利用は不明である。一方、やや離れた倉吉市では、両長谷遺跡で弥生時代後期後半、下張坪遺跡で弥生時代終末の住居跡から出土した炭化材の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1997a,1997b）。その結果では、いずれもスダジイを含むシノキ属が多く認められている。シノキ属の利用は、本遺跡とも共通するが、クリの利用がみられない点で異なる。しかし、こうした違いが地域的な違いによるものか、現時点では詳細は不明であり、今後の検討課題として残される。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997a,両長谷遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類.「倉吉市文化財調査報告書第89集 両長谷遺跡発掘調査報告書」,倉吉市教育委員会,57-61.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997b,下張坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種.「倉吉市文化財調査報告書第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書」,倉吉市教育委員会,113-123.

第3節 久蔵谷遺跡製炭土坑出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

久蔵谷遺跡では、竪穴住居跡、段状遺構、製炭土坑、土坑、溝状遺構等が確認されている。このうち、製炭土坑からは、製炭されたと考えられる木炭と、それを被覆するような小枝材が出土している。

本報告では、製炭土坑内の木材利用を明らかにするために、出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、SK2とSK3から出土した炭化材各10点、合計20点である。

2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表5に示す。炭化材は、全て常緑広葉樹のスダジイに同定された。解剖学的特徴等を記す。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*(Makino Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2列幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

4. 考察

SK2とSK3は、土坑の形態が不整円形～楕円形を呈する。下層に長さ2-5cm、横1.8-4.5cm、厚さ1-2.5cmの製炭材と考えられる炭化材があり、その上に長さ2-3.5cm、横1.1-2cm、厚さ0.7-1.5cmの小枝状の炭化材が認められた。製炭方法は現在もみられる簡易な方法である穴焼法と考えられ、小枝状の炭化材は製炭する木材の被覆材または燃焼材として用いられたことが推定されている。土坑内から時期決

表5 樹種同定結果

遺構	番号	性 格	樹 種
SK 2	1	炭	スダジイ
	2	燃焼材または被覆材	スダジイ
	3	炭	スダジイ
	4	炭	スダジイ
	5	燃焼材または被覆材	スダジイ
	6	炭	スダジイ
	7	炭	スダジイ
	8	炭	スダジイ
	9	燃焼材または被覆材	スダジイ
	10	炭	スダジイ
SK 3	1	燃焼材または被覆材	スダジイ
	2	燃焼材または被覆材	スダジイ
	3	燃焼材または被覆材	スダジイ
	4	燃焼材または被覆材	スダジイ
	5	燃焼材または被覆材	スダジイ
	6	炭	スダジイ
	7	炭	スダジイ
	8	炭	スダジイ
	9	炭	スダジイ
	10	炭	スダジイ

定できる遺物は出土していないが、炭化材の年代測定ではいずれも6～7世紀を示す年代が得られている。これらの炭化材は、全てスダジイであり、製炭材と燃焼材または被覆材とで樹種に違いは見られなかった。この結果から、スダジイの木材を製炭する際に、太い部分を製炭材、細い小枝等を被覆材または燃焼材にそれぞれ分けた可能性もある。スダジイは、重硬で強度が高い材質を有するが、乾燥による狂いが大きく、耐朽性もやや低い部類に入り、建築・薪炭材などとして利用される（平井, 1979）。スダジイは、暖温帯常緑広葉樹林の構成種であり、現在でも本地域に生育している。本遺跡では、古墳時代前期以前の住居跡から出土した炭化材にもスダジイが認められている。製炭土坑の樹種同定結果から、6～7世紀の段階でも遺跡周辺にスダジイが生育しており、その木材を製炭した可能性がある。

本地域では生産遺構、例えば製鉄や窯等から出土した燃料材の樹種を明らかにした例がほとんどない。また、遺跡における検出状況等も含めて、現時点ではスダジイの木炭の用途については不明である。今後、同時期の生産遺構における燃料材の木材利用状況に関する資料を蓄積し、木炭の用途についても検討していきたいと考える。

引用文献

平井 信二,1979,木の事典 第3巻.かなえ書房.

第5章 まとめ

久蔵谷遺跡では、竪穴住居跡2棟、土坑6基、段状遺構1基、溝状遺構1条、ピット3基が確認された。ここでは久蔵谷遺跡で確認した遺構・遺物について若干触れ、まとめとしたい。

集落関連遺構として、その性格が窺えるものに竪穴住居跡2棟があった。このうちSI2の時期は出土遺物から古墳時代前期初頭と考えられた。SI1は出土遺物から帰属時期を窺うことはできなかったが、調査状況から古墳時代前期頃と思われる。この久蔵谷遺跡に竪穴住居が営まれた古墳時代前期における周辺の集落遺跡には、井岡地頭遺跡（君嶋・大野他 2003）、三林遺跡（家塚・君嶋他 2004）、笠見第3遺跡（牧本他 2004）、久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡（小山・野口・長尾他 2004）、八橋第2遺跡～第4遺跡（大賀 2001）が知られる。このうち本遺跡SI2で具体的に帰属時期が窺えた古墳時代前期初頭に限れば、三林遺跡、笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡で集落が展開される。

上記の3遺跡の様相は、いずれの遺跡においても弥生時代後期後葉は集落としての最盛期に位置づけられるが、続く弥生時代後期末から古墳時代前期初頭においては縮小期を迎える。このうち笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では集落の営みはさらに衰退し、古墳時代前期中葉から後葉にかけて集落は中断する。しかし、三林遺跡においては、前期前葉から中葉にかけては、再び最盛期を迎える状況になる。このことに対し、三林遺跡では、東に近在する井岡地中ソネ遺跡（君嶋・大野他 2003）が弥生時代後期後葉は集落として営まれるが、古墳時代前期初頭に墓域化することから、この時期に三林遺跡と井岡地中ソネ遺跡の集落間で統廃合が行われたことが推測されている（家塚・君嶋他 2004）。

このように周辺遺跡の動向と照らし合わせて見た場合、久蔵谷遺跡で竪穴住居の造営が始まる古墳時代前期初頭の時期は、周辺遺跡においては集落として縮小期にあったことがわかる。そして、いずれの集落遺跡においても同時期に縮小期を迎えることから、近在する集落でその営みに強い関連性があったことが窺える。このことからすると久蔵谷遺跡における竪穴住居の造営も、周辺遺跡の動向と深い関係があったと思われる。本遺跡を周辺遺跡との関係から捉えた場合、本遺跡竪穴住居の造営は近在する久蔵峰北遺跡から分散した可能性が高い。両遺跡は間に比高差30mの谷を挟み、別の尾根に立地するが、距離は70mと指呼の間にあり、お互いに見晴らしも良い。そして本遺跡竪穴住居の存続が長くとも前期までとすることも、久蔵峰北遺跡の集落の消長と一致するものである。

上述の解釈が妥当であるならば、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭における周辺集落遺跡の縮小化は、久蔵谷遺跡と久蔵峰北遺跡の関係から窺うことができた分散が要因の一つとして考えられる。そしてさらに、古墳時代前期前葉の三林遺跡における集落統合などを勘案すると、久蔵谷遺跡で竪穴住居が営まれる時期は、分散や統合など周辺の集落が再編を迎えた時期であったと考えることができるかもしれない。

さて、以上のように周辺集落の再編期に営まれた久蔵谷遺跡竪穴住居であるが、確認されたSI1・2はともに焼失住居であった。県内の焼失住居に関しては、弥生時代後期後葉に卓越して認められることが指摘されるほか、その頃の焼失住居には、床面出土遺物の多寡から、片付け行為をした後、放火により廃棄されたものが多かったことが考えられている（牧本 2002）。SI1は遺構の遺存状況は芳しくなかったため、これらのことについて具体的にはできないが、SI2は第3章で触れた通り、片付け行為が行われたと考えられ、住居の焼失要因は、失火ではなく放火であった可能性が高い。上屋構造については、住居埋土下層から垂木材と判断される多くの炭化材の出土が見られた。そして炭化

した垂木材に挟み込まれ、住居焼失間に堆積したと判断される土層の存在から、土屋根の可能性が高いと思われる。また出土炭化材においては樹種同定分析の結果、クリとスダジイが建築部材として用いられていたことが明らかとなった。鳥取県中部における弥生時代後期から古墳時代前期の住居建材へのクリ材利用に関しては、従来の調査では明らかでなかったが、近年、井図地中ソネ遺跡、三林遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡などで確認されている。

そのほかSI2P4直上からその縁辺部にかけては、棒状の礫が14個まとめられた状態で認められた。これらは見た目にはその大きさにあまり違いは認められず、石材の種類も角閃石安山岩や角閃石石英安山岩であるなど、一見では同じ石材に見えることから、同質、同規格を意識したものであったと思われる。使用の痕跡は1点に敲打痕が確認されたほかは、明確な痕跡は認められなかった。このような集礫の例は、近隣の遺跡では倉吉市夏谷遺跡（森下他 1996）、同市立縫遺跡群（倉吉市教育委員会 1986）、琴浦町三林遺跡などがあげられる。立縫遺跡群の礫はその詳細は不明であるが、夏谷遺跡では使用痕から石錘、三林遺跡では煤の付着から炉などに土器を据え置くための支石としての機能が考えられている。本集礫の性格は使用の痕跡がほとんど確認されなかったことから明らかでないが、柱の際に並べられていた出土状況は、礫の利用方法や保管方法を反映している可能性がある。

集落関連遺構以外には製炭土坑と思われる4基の土坑が注目される。これらは遺構内に焼土や被熱痕がほとんど認められなかったが、製炭土坑は材を完全に燃やさず製炭させることから、土坑床面の赤色焼土化はせず、壁の焼成も弱いなどの指摘（木立 1997）もあり、炭化材の出土状況からは製炭土坑と位置づけることが妥当と思われる。また、従前の調査研究では製炭土坑の多くは伏焼き法として、焚口部を設けるものと設けないものを一括して扱われている（村田 1991）が、本遺構ではその規模、形態、焚口などの施設を設けられた痕跡が認められなかったことから、穴焼き法と類似したものと考えられた。また、放射性炭素年代測定法による炭化材の分析の結果、5世紀末から6世紀中頃の時期が推定されるが、上記の伏焼き法としてまとめられる製炭土坑は、鍛冶関連の木炭窯として5世紀末から認められるようである（穴澤 2003）。周辺の遺跡においては、別所中峯遺跡で確認された製炭土坑も、同遺跡や隣接する八橋8・9遺跡で確認された鍛冶関連遺物との関係で捉えられている（大野他 2004）。本遺跡の場合も遺跡東側に位置する中道東山西山遺跡（高尾他 2005）で鍛冶関連施設が確認されているが、9世紀代のものであり、本遺構と同時期の遺構が周辺の遺跡において認められていない状況では、現在の段階ではその製炭の目的は明らかでない。

以上、久蔵谷遺跡で確認された遺構・遺物について若干触れたが、その多くは具体的に検討するまでには至らなかった。今後の課題としたい。（野口）

参考文献

- 穴澤義功 2003「古代製鉄に関する考古学的考察」『近世たたら製鉄の歴史』丸善プラネット
 家塚英詞・君嶋俊行他 2004『三林遺跡・井図地頭遺跡』鳥取県教育文化財団
 大野哲二他 2004『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』鳥取県教育文化財団
 大賀靖浩 2001『八橋第2遺跡～第4遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
 木立雅朗 1997「土器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編
 君嶋俊行・大野哲二他 2003『井図地頭遺跡・井図地中ソネ遺跡』鳥取県教育文化財団
 倉吉市教育委員会 1986『立縫遺跡群発掘調査概要』
 小山浩和・野口良也・長尾かおり他 2004『久蔵峰北遺跡・蝮谷遺跡・岩本遺跡』鳥取県教育文化財団
 高尾浩司他 2005『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団
 牧本哲雄 2002「妻木晩田遺跡の焼失住居について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会
 牧本哲雄他 2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団
 村田文雄 1991「発掘調査された炭焼窯の基礎的研究」『物質文化』55物質文化研究会
 森下哲哉他 1996『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

表6 土器観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量(cm)	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	SI2	第13図 PL.9	土師器 甕	器高5.2△ 口径17.0※	外面口縁部・頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	口縁部一部 スス付着
2	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高6.4△ 口径12.6※	外面口縁部・肩部ヨコナデ・刺突文。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ。	やや密(1mm 以下の砂粒を 含む)	良	内外面明黄 褐色	外面スス付 着
3	SI2 南東区 埋土中	第13図 PL.8	土師器 甕	器高6.3△ 口径17.2※	外面口縁部ナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ナデ。肩部ヘラケズリ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面浅黄 色	
4	SI2	第13図 PL.7	土師器 甕	器高17.0△ 口径13.6※ 胸部最大径 16.6※	外面口縁部沈線・ナデ。頸部ナデ。胸部 ハケ。内面口縁部ナデ。胸部ヘラケズリ。	密(3mm以下の 砂礫を含む)	良	内面にぶい 黄褐色 外面にぶい 黄橙色	内外面スス 付着
5	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高9.6△ 口径15.8※	外面口縁部ナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ナデ。肩部ヘラケズリ。	やや密(2mm 以下の砂礫を 含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	
6	SI2	第13図 PL.8	土師器 甕	器高8.7△ 口径16.4※	外面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ目。 内面口縁部ヨコナデ。肩部ヘラケズリ後 ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	やや 良	内外面浅黄 褐色	外面口縁部 スス付着
7	SI2	第13図 PL.7	土師器 鼓形器台	器高14.8 口径23.5 底径20.8	外面受部ナデ後ハケ目。筒部・脚部ナデ。 内面受部・脚部ナデ。筒部ヘラケズリ後 ナデ。	密(4mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面明黄 褐色～橙色	内外面スス 付着
8	SI2	第13図 PL.9	土師器 高坏	器高4.0△ 口径19.6※	外面口縁部ヨコナデ。 内面口縁部ヨコナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	
9	SI2	第13図 PL.9	土師器 低脚坏	器高2.3△ 底径6.4	外面脚部ナデ。 内面脚部ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面浅黄 褐色	
10	SS1 2層	第27図 PL.9	土師器 甕	器高6.7△ 口径14.4※	外面口縁部ヨコナデ。肩部ハケ。 内面口縁部ヨコナデ。頸部ヘラケズリ後 ナデ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面浅黄 褐色	外面スス付 着
11	SS1 3層	第27図 PL.9	土師器 甕	器高7.4△	外面口縁部・頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ヘラケズリ後ナデ。	やや密(1mm 以下の砂粒を 含む)	良	内外面浅黄 褐色	
12	SS1 3層	第27図 PL.9	土師器 低脚坏	器高2.4△ 底径7.0※	外面脚部ヨコナデ。 内面坏部ナデ。脚部ナデ。	やや密(2mm 以下の砂礫を 含む)	良	脚部内外面 橙色 坏部浅黄色	
13	SS1 2層	第27図 PL.9	土師器 高坏	器高4.9△ 口径29.9※	外面坏部ミガキ。 内面坏部ミガキ。	密(3mm以下の 砂礫を含む)	良	内外面浅黄 褐色	
14	J3 表土	第30図 PL.8	土師器 台付甕	器高7.2△ 胸部最大径 14.7	外面胸部・台部ハケ後ナデ。 内面胸部・台部ヘラケズリ後ナデ。	密(2mm以下の 砂礫を含む)	良	内面明黄褐 色 外面浅黄色	
15	K3 表土	第30図 PL.8	土師器 低脚坏	器高4.7△ 底径12.2※	外面坏部・脚部ハケ後ナデ。 内面坏部・脚部ナデ。	密(1mm以下の 砂粒を含む)	良	内外面にぶ い黄橙色	赤彩

表7 石器・礫観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
S1	SI2	第13図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.0	10.0	4.7	985	
S2	SI2	第13図 PL.10	剥片	水晶	4.1	1.7	1.2	6.7	
S3	SI2	第13図 PL.9	砥石	細粒花崗岩	26.8	14.4	10.1	5,200	表面に磨面あり
S4	SI2 P4上面	第14図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.1	8.0	4.0	878	
S5	SI2 P4上面	第14図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	17.2	5.7	5.0	840	
S6	SI2 P4上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	18.3	8.7	4.0	1,087	
S7	SI2 P4上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.5	6.1	5.0	771	

久蔵谷遺跡遺物観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
S8	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.7	7.6	5.5	1,069	
S9	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.4	7.5	4.4	840	
S10	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	16.0	7.7	5.9	1,088	
S11	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	14.7	7.0	6.2	1,243	
S12	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.4	7.6	3.6	684	
S13	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石石英安山岩	16.3	7.1	4.2	701	
S14	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	14.9	7.1	4.9	704	
S15	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	16.1	6.3	4.3	697	敲打痕あり
S16	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	18.7	7.5	4.9	909	
S17	SI2 P4 上面	第15図 PL.9	礫	角閃石安山岩	17.2	6.0	4.6	763	
S18	SS1	第27図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	8.6	4.6	3.4	207	片側に敲打痕あり
S19	SD1 2層	第29図 PL.10	石錘	角閃石石英安山岩	8.3	5.6	2.3	164	楕円礫の長軸両端 を打ち欠く
S20	SD1 2層	第29図 PL.10	石錘	角閃石安山岩	7.1	6.3	2.7	171	楕円礫の長軸両端 を打ち欠く
S21	I4 表土	第31図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	15.5	5.7	4.3	599	表面・両端部・両 側面に敲打痕あり
S22	L3 表土	第31図 PL.10	敲石	角閃石安山岩	12.7	6.0	4.2	459	上端部に敲打痕あ り
S23	I5 表土	第31図 PL.10	石錘	石英黒雲母安山岩	9.0	6.7	2.2	171	楕円礫の両端・両 側面を打ち欠く
S24	B2 表土	第31図 PL.10	石錘 磨石 敲石	角閃石安山岩	9.2	7.8	4.9	484	表面に磨面、表裏・ 両側面に敲打痕あ り
S25	遺跡一括	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	1.0	凹基無茎鏃
S26	C2 表土	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.7	凹基無茎鏃
S27	L4 表土	第31図 PL.10	石鏃	黒曜石	2.2	1.7	0.6	1.2	凹基無茎鏃

表8 鉄製品観察表

No.	遺構・地区 層位名	挿図 PL	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備 考
F1	SI2	第13図 PL.10	鑿状鉄製品	3.0	1.9	1.1	5.0	

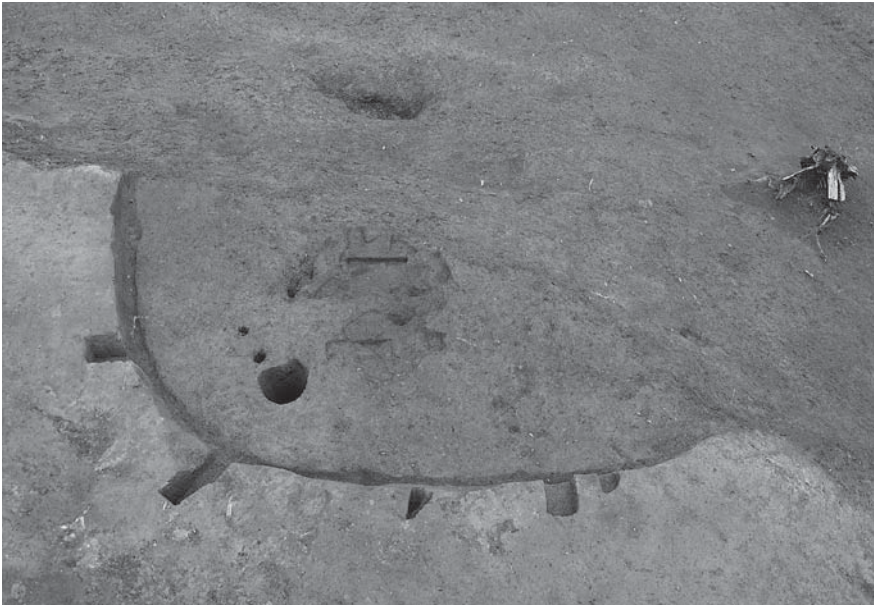
写 真 图 版

PLATE

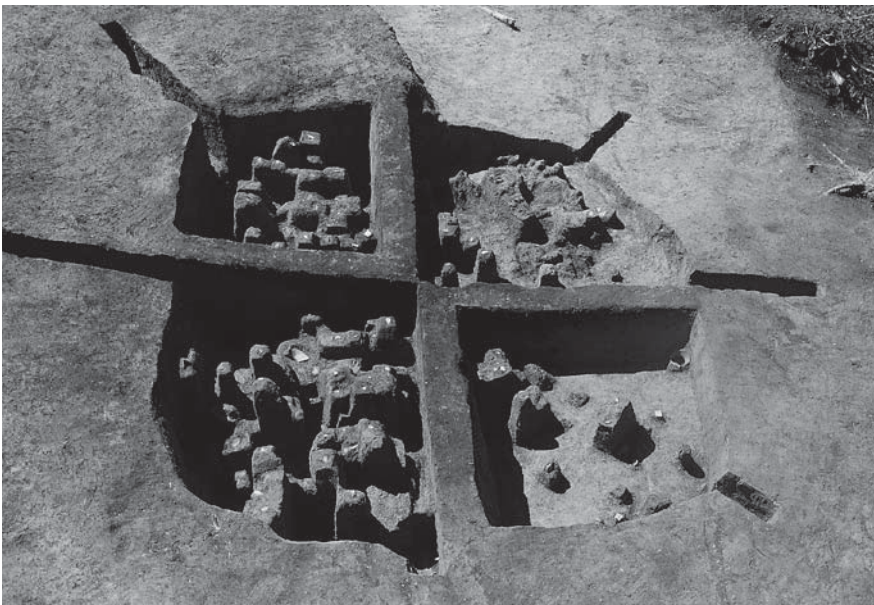
PL.1 久蔵谷遺跡



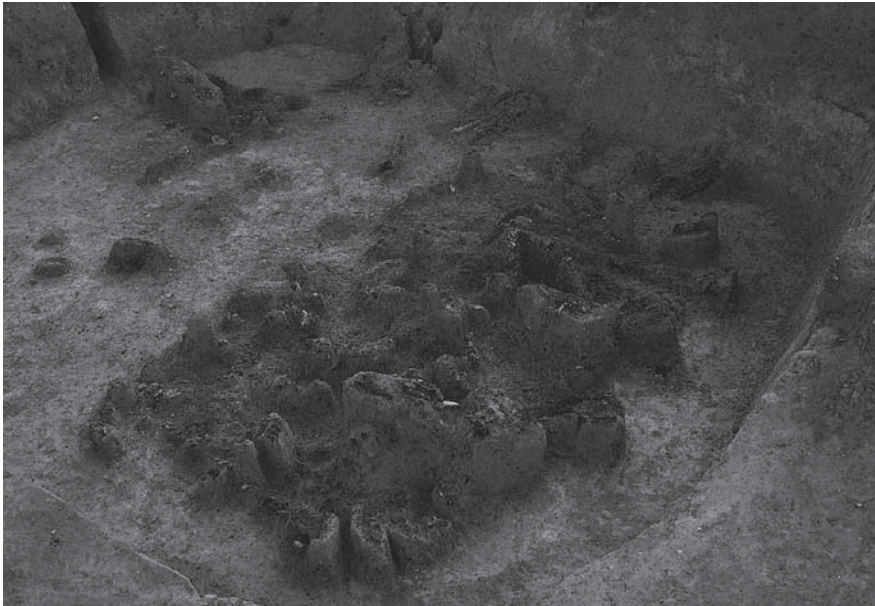
SI 1 遺物出土状況
(南東から)



SI 1 完掘状況
(北東から)



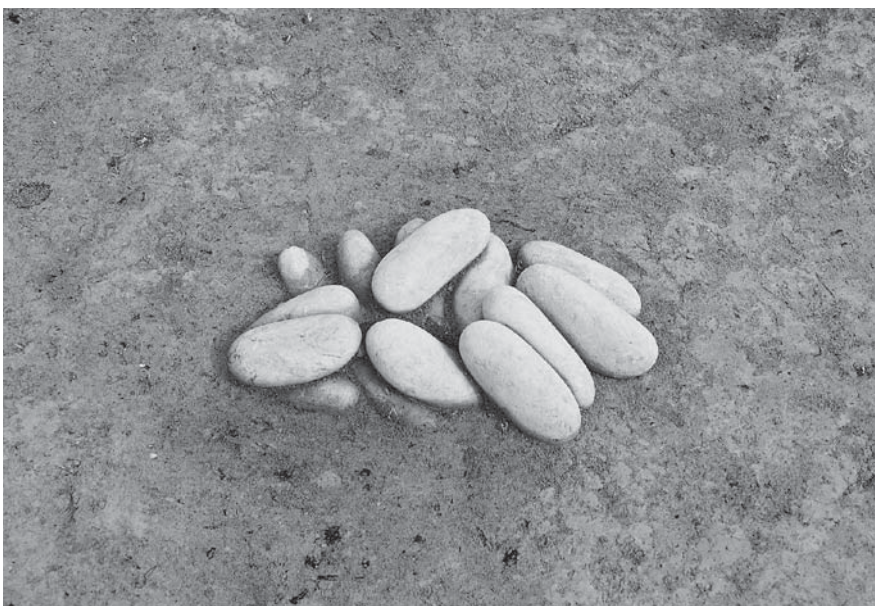
SI 2 遺物出土状況
(北東から)



SI 2 炭化材出土状況
(西から)



SI 2 P4上面集礫出土状況
(東から)



SI 2 P4上面集礫出土状況
(西から)

PL.3 久蔵谷遺跡



SI 2 完掘状況
(北東から)



SI 2 貼床除去後
(北東から)



SK 1 完掘状況
(西から)



SK 2 土層断面
(南西から)

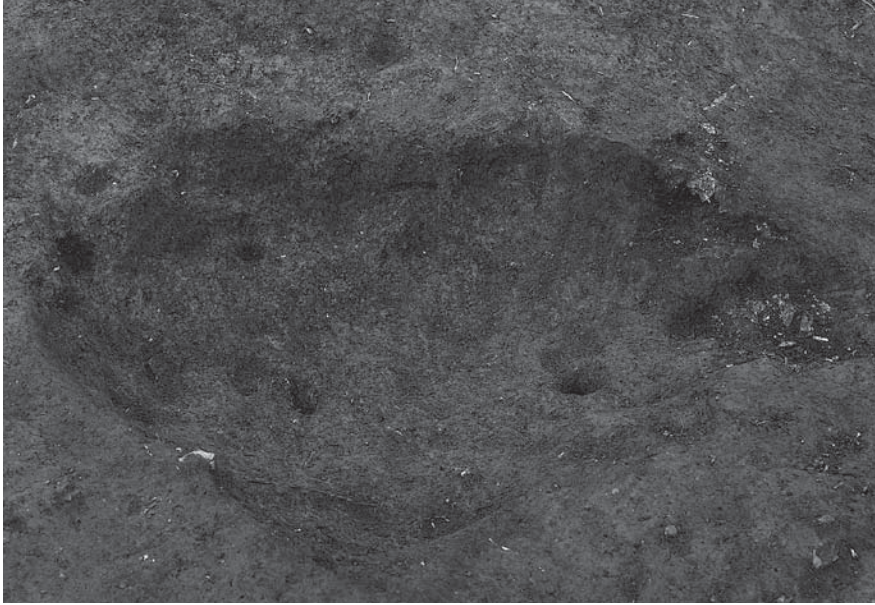


SK 2 完掘状況
(北東から)

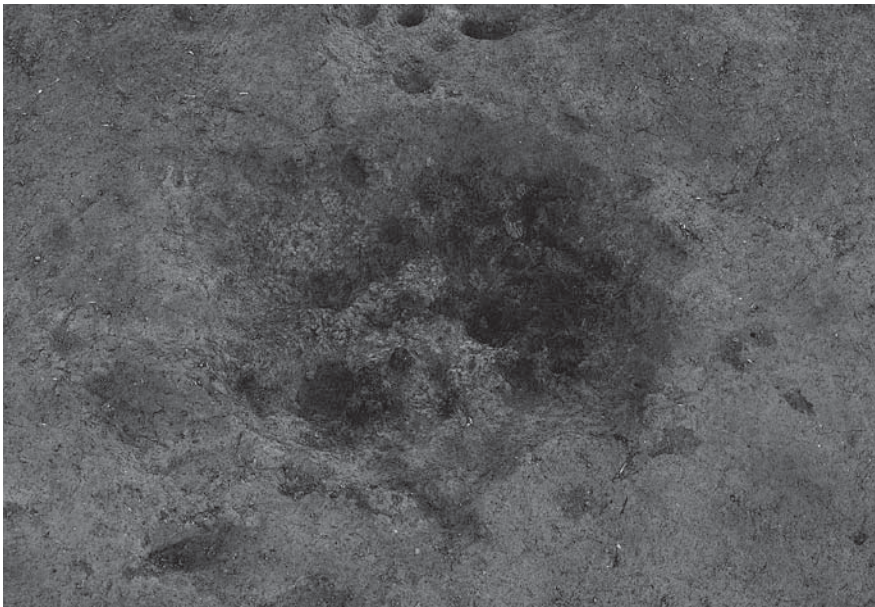


SK 3 炭化材出土状況
(北西から)

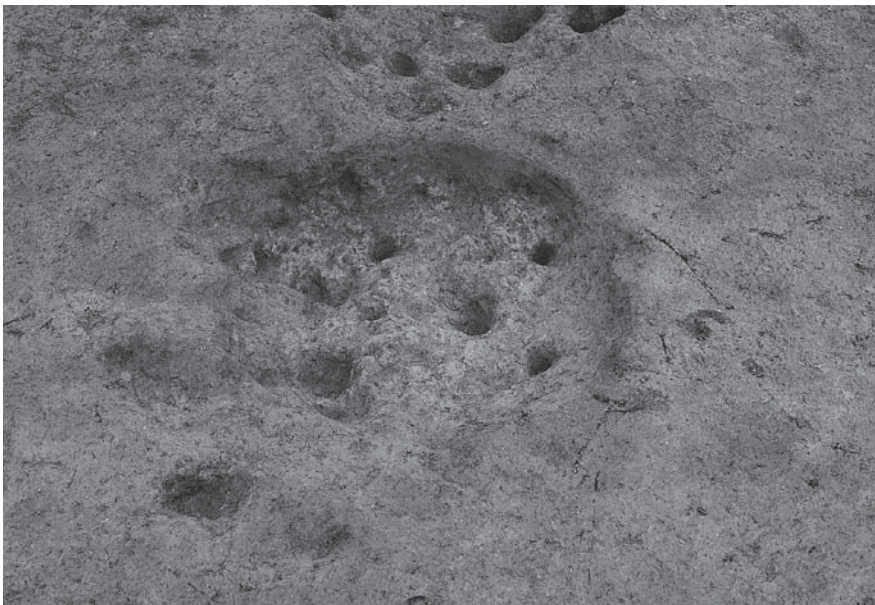
PL.5 久蔵谷遺跡



SK 3 完掘状況
(東から)



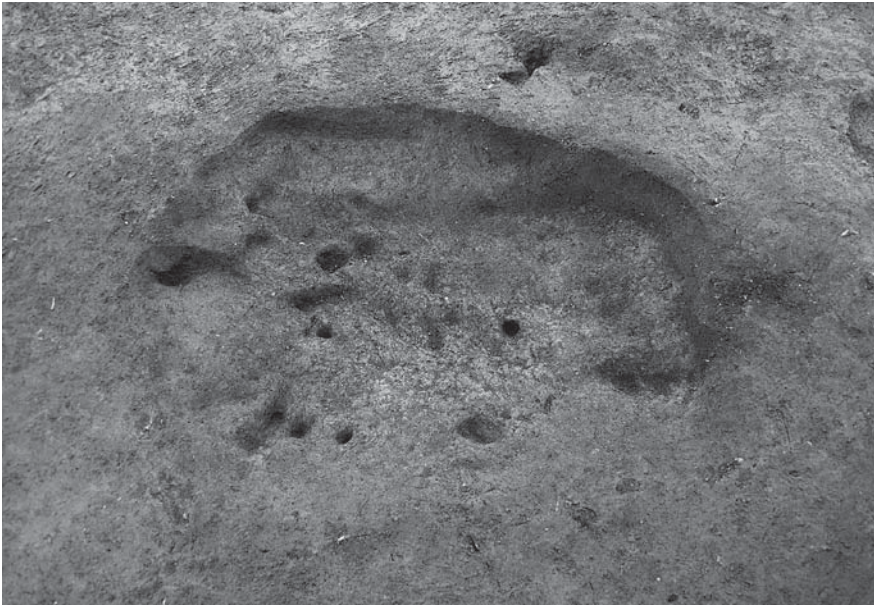
SK 4 炭化材出土状況
(北から)



SK 4 完掘状況
(北から)



SK 5 炭化材出土状況
(東から)



SK 5 完掘状況
(東から)

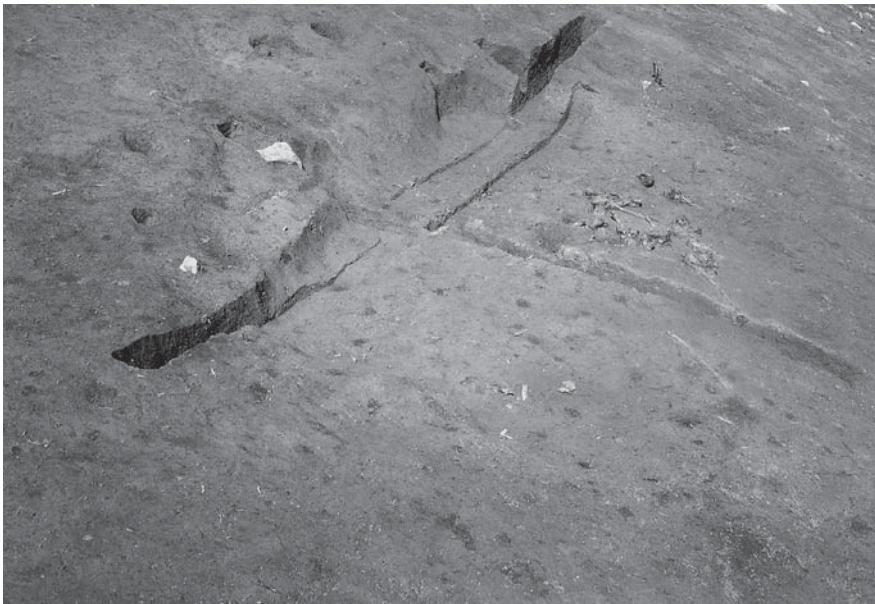


SK 6 完掘状況
(北東から)

PL.7 久蔵谷遺跡



SS 1 遺物出土状況
(南から)



SS 1 完掘状況
(南東から)



SI 2 出土土器

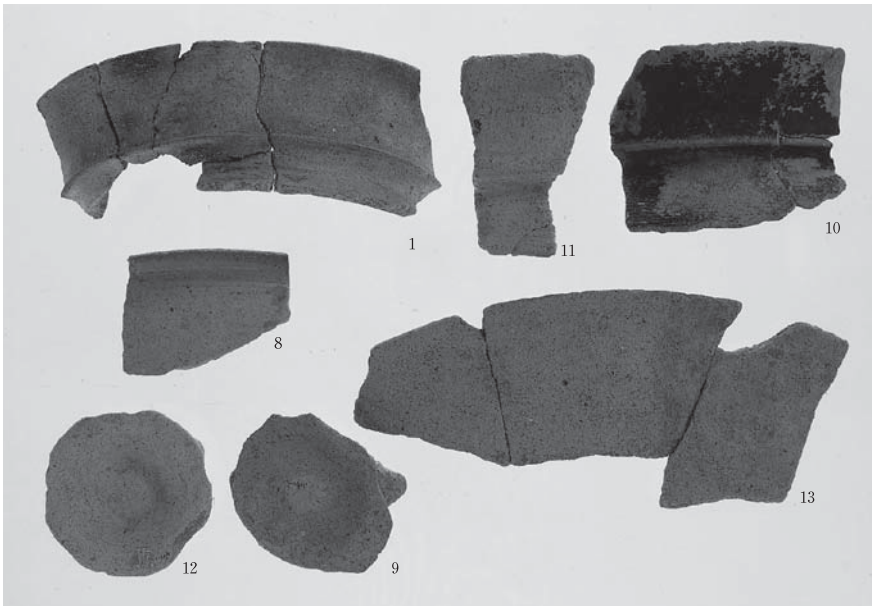


SI 2 出土土器

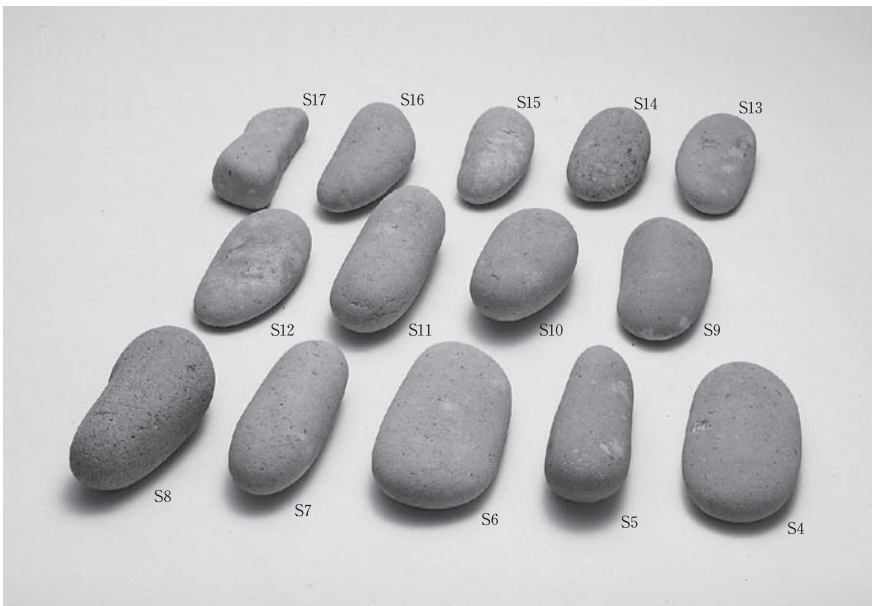


表土出土土器

PL.9 久蔵谷遺跡



SI 2・SS 1 出土土器



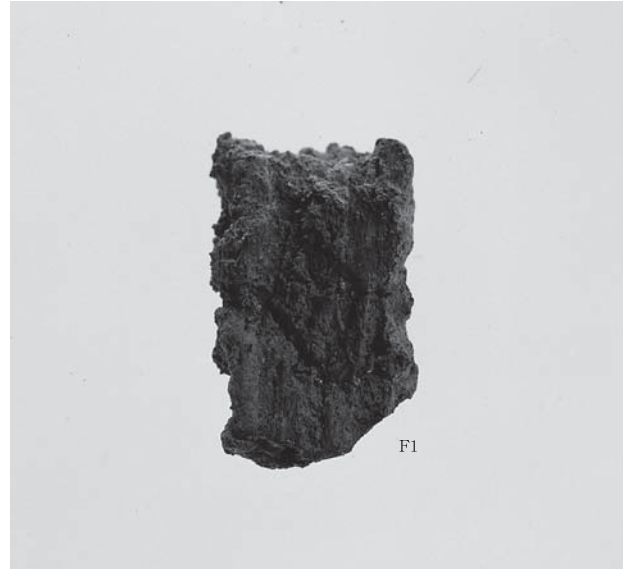
SI 2 P4上面出土礫



SI 2 出土石器・礫



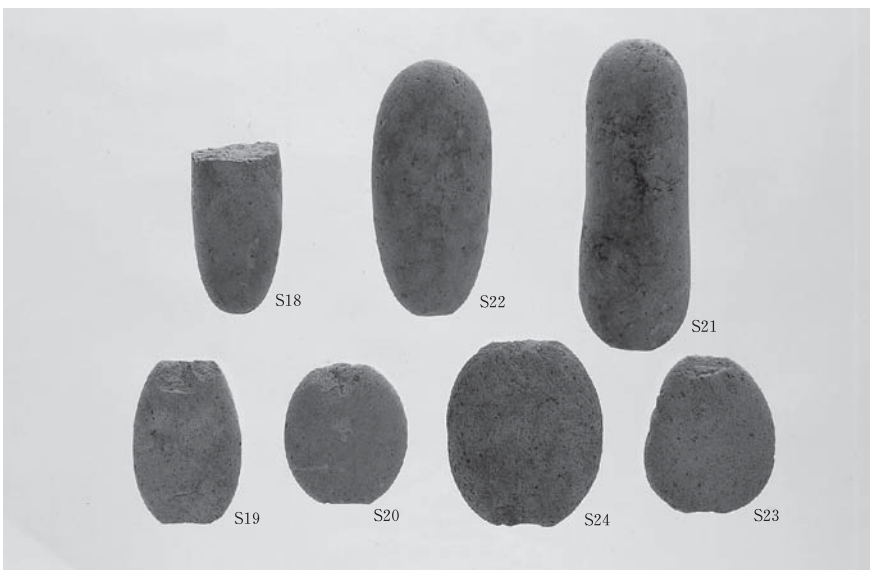
SI 2 出土水晶剥片



SI 2 出土鉄製品

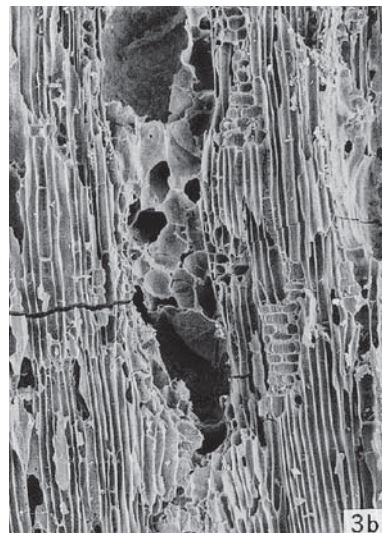
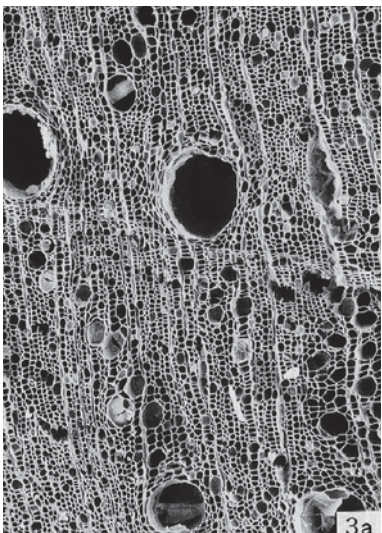
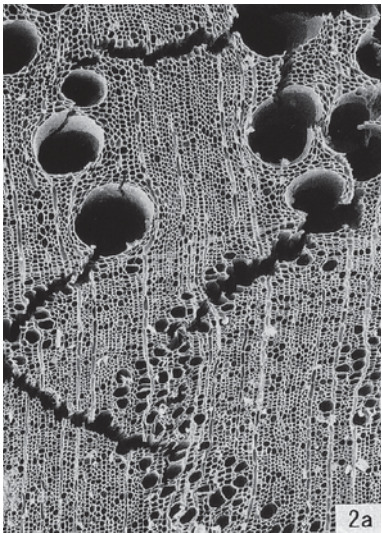
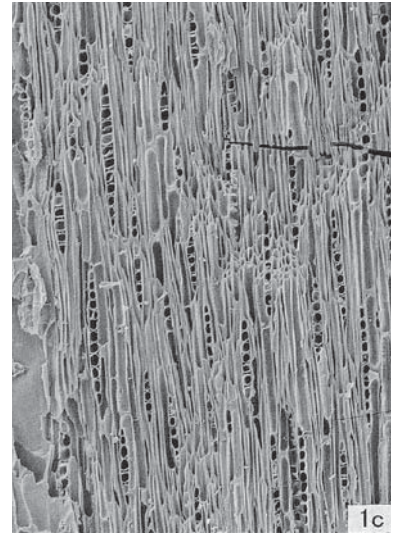
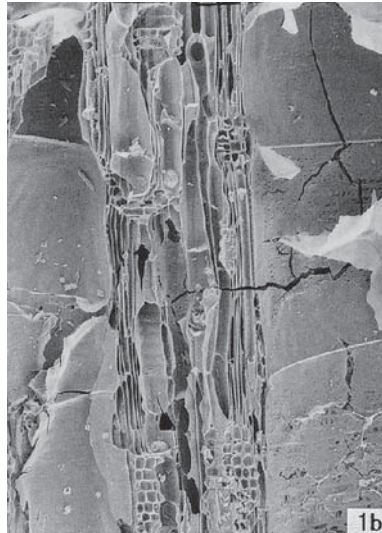
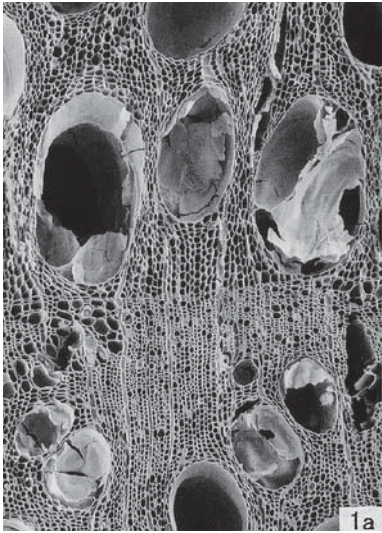


表土・遺跡一括 出土石器



SS 1・SD 1・表土
出土石器

PL. 11 久蔵谷遺跡



- 1. クリ (SI 2 試料No.1)
- 2. スダジイ (SI 2 試料No.4)
- 3. スダジイ (SK 2 試料No.1)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m: a
200 μ m: b, c

報告書抄録

ふりがな	きゅうぞうだにいせき							
書名	久蔵谷遺跡							
副書名	一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	97							
編著者名	野口良也、濱本利幸、阪上志緒里							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうぞうだにいせき 久蔵谷遺跡	とっとりけんとうほくぐん 鳥取県東伯郡 ことうらちょうおおあざかきみ 琴浦町大字笠見 あざかじょうざかほか 字加杖阪578他	31371	311	35° 29' 29"	133° 40' 14"	20040304 ～ 20041028	3,245㎡	一般国道9号 （東伯中山道路） の改築
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
久蔵谷遺跡	集落	古墳時代	竪穴住居 跡2棟、 段状遺構 1基	土師器				
	その他	古墳時代	製炭土坑 4基					
		時期不明	土坑2基、 溝状遺構 1条					

鳥取県教育文化財団調査報告書97
一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX
鳥取県東伯郡琴浦町

久蔵谷遺跡

発 行 2005年3月22日
編 集 財団法人鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260
電話（0857）27-6717
発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団
印 刷 有限会社 谷岡印刷